

福重稻木遺跡

—第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第961集

2007

福岡市教育委員会

FUKU SHIGE INA GI

福重稻木遺跡

—第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第961集



調査番号 0345
遺跡番号 FSI-3

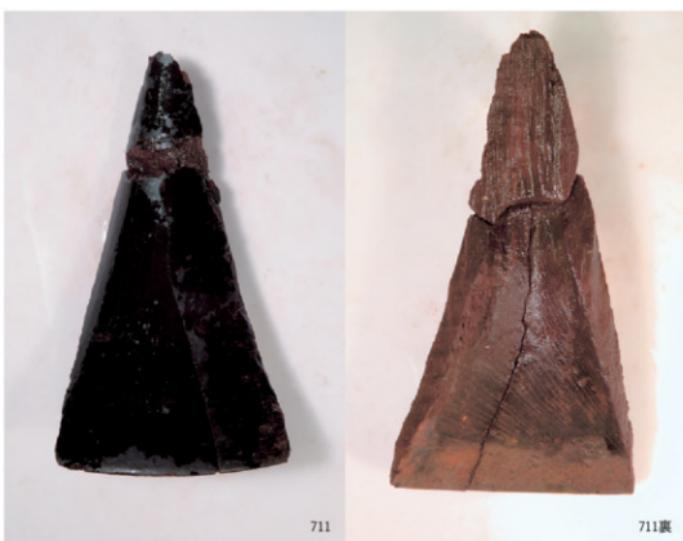
2007

福岡市教育委員会



15

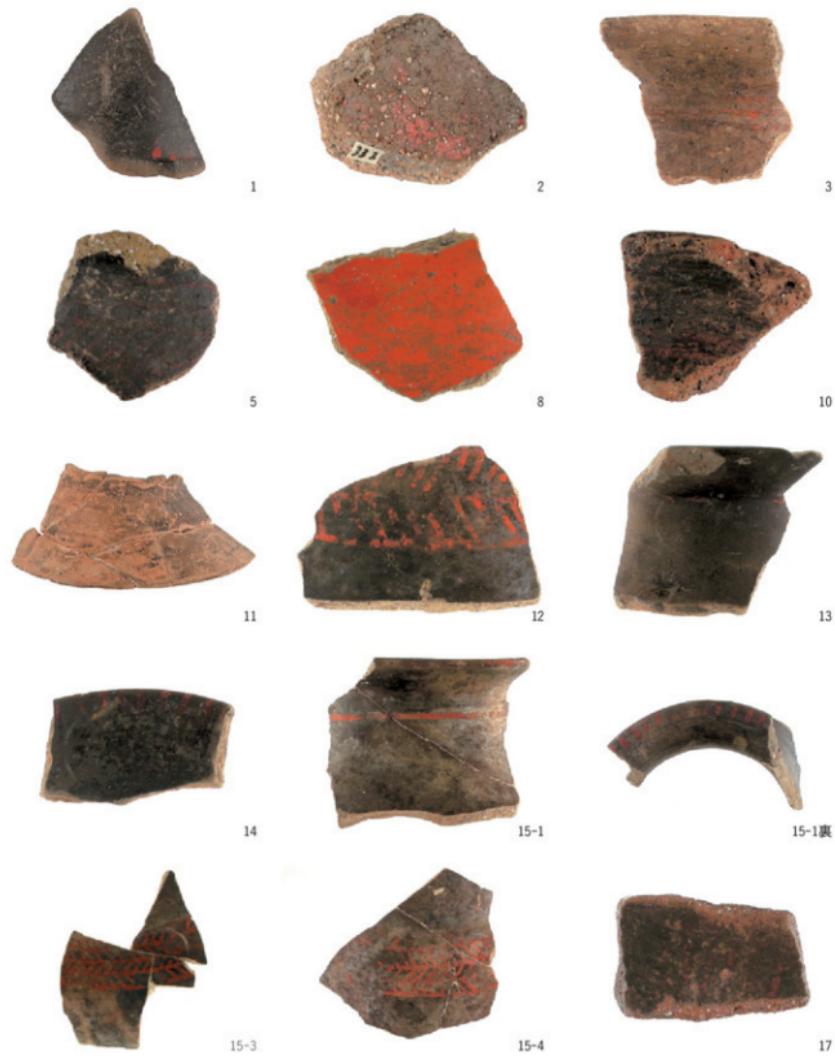
(1) 彩文土器



711

711裏

(2) 漆器



(3) 彩文土器等

序

福岡市には、豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な努めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成15年度に実施した道路改良事業に伴う福重稻木遺跡第3次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご利用頂ければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの謝意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は道路改良事業に伴い西区福重4丁目において平成15年10月15日から同15年11月8日に発掘調査を実施した福重稻木遺跡第3次調査の報告である。
2. 本書に使用した方位は磁北で、座標北から6°21'西偏する。
3. 本書に使用した遺構、遺物の実測、写真撮影は巻頭図版2を比佐が撮影し、挿図の製図のうち土器を山崎賀代子が行い、その他および執筆は担当者が行った。
4. 彩文土器の顔料分析を本市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎が行い、その結果を13頁の表1に示した。
5. 出土木材の放射性炭素年代測定はパリノサーヴェイが株式会社加速器分析研究所の協力を得て行った。結果のみ13頁表2、3に示した。
6. 土器の図でアミかけ部分は赤色顔料が施されていることを示す。
7. 本書の作成にあたり上田保子、窪田慧、鶴早苗、前田みゆき、安永令子の協力を得た。
8. 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

遺跡調査番号	0345	遺跡略号	FSI-3
所 在 地	西区石丸4丁目283-6、281-2	分布地図番号	90(石丸)
開 発 面 積	1080m ²	調 査 面 積	170m ²
調査期間	031015~031108	事前審査番号	15-1-040

目 次

I.	はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1	
2. 調査組織	1	
II.	立地と環境	1
III.	調査の記録	3
1. 調査の概要	3	
2. 層位	3	
3. 検出遺構	5	
4. 出土遺物	11	
(1) 土器	11	
(2) 土製品	36	
(3) 石器	37	
(4) 木器	44	
IV.	終わりに	45

挿図目次

Fig. 1	周辺の遺跡分布図 (1/2500)	
Fig. 2	福重稻木遺跡調査地点と周辺の地形 (1/4000)	
Fig. 3	福重稻木遺跡調査区位置図 (1/600)	2
Fig. 4	2次、3次調査区全体図 (1/100)	4
Fig. 5	土層図 1 (1/80)	6
Fig. 6	土層図 2 (1/80)	7
Fig. 7	しがらみ、杭列実測図 1 (1/40)	9
Fig. 8	杭列実測図 2 (1/40)	10
Fig. 9	彩文土器実測図 (1/3)	12
Fig. 10	4層出土土器実測図 (1/3)	14
Fig. 11	7層出土土器実測図 1 (1/3)	16
Fig. 12	7層出土土器実測図 2 (1/3)	17
Fig. 13	7層出土土器実測図 3 (1/3)	18
Fig. 14	7層出土土器実測図 4 (1/3)	19
Fig. 15	7層出土土器実測図 5 (1/3)	20
Fig. 16	10層出土土器実測図 1 (1/3)	22
Fig. 17	10層出土土器実測図 2 (1/3)	23
Fig. 18	10層出土土器実測図 3 (1/3)	25
Fig. 19	10層出土土器実測図 4 (1/3)	26
Fig. 20	10層出土土器実測図 5 (1/3)	27
Fig. 21	10層出土土器実測図 6 (1/3)	28
Fig. 22	11層出土土器実測図 1 (1/3)	30
Fig. 23	11層出土土器実測図 2 (1/3)	31
Fig. 24	11層出土土器実測図 3 (1/3)	32
Fig. 25	11層出土土器実測図 4 (1/3)	34
Fig. 26	その他の土器実測図 1 (1/3)	35
Fig. 27	その他の土器実測図 2 (1/3)	36
Fig. 28	土製品実測図 (1/2)	37
Fig. 29	礫石器実測図 1 (1/3)	38
Fig. 30	礫石器実測図 2 (1/3)	39
Fig. 31	礫石器実測図 3 (1/3)	40
Fig. 32	剥片石器実測図 1 (3/4)	41
Fig. 33	剥片石器実測図 2 (3/4)	42
Fig. 34	剥片石器実測図 3 (3/4)	43
Fig. 35	木器実測図 (1/3)	45

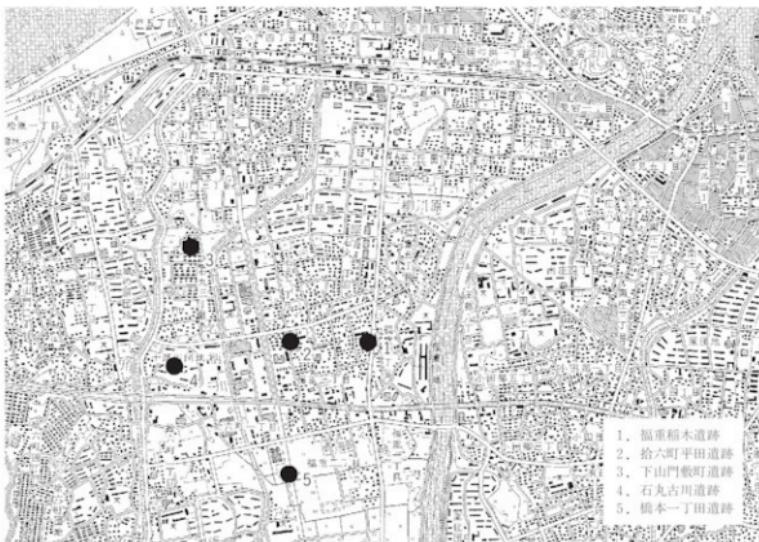


Fig. 1 周辺の遺跡分布図 (1/2500)

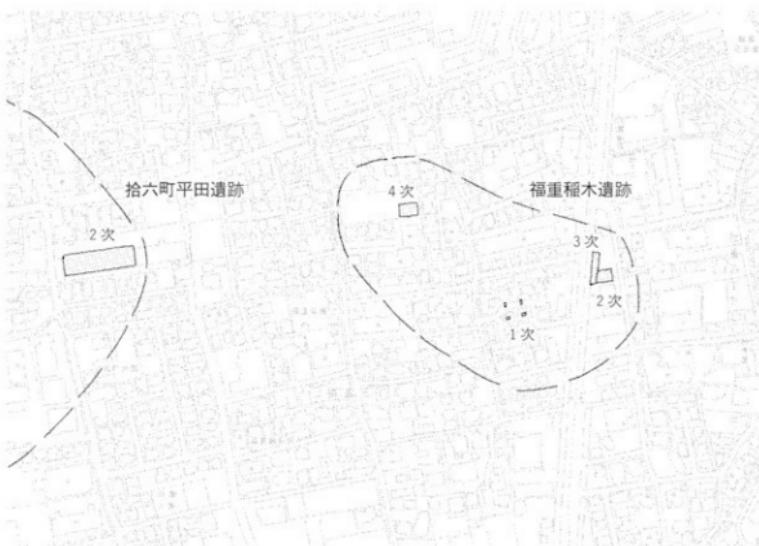


Fig. 2 福重稻木遺跡調査地点と周辺の地形 (1/4000)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会では、文化財保護法第57条の3に係わる事業について、事前に事業計画を把握し、埋蔵文化財保護のための調整を進めている。平成15（2003）年9月4日付けで福岡市土木局（西部建設2課）から、西区石丸4丁目地内における都市計画道路姪浜飯盛線道路改良事業計画地について、埋蔵文化財有無確認の依頼があった。これを受けて埋蔵文化財課では、同年9月10日計画地の試掘調査を実施し、埋蔵文化財が遺存することを確認した。

埋蔵文化財課では、当該計画内容について現状での保存処置の検討を行った。しかし、工事計画の内容から地下の埋蔵文化財に対する影響は避けられないものと判断し、やむなく記録保存の処置をとることとした。

記録保存の発掘調査は、土木局（西部建設2課）の依頼を受けて、福岡市教育委員会が実施することとなった。教育委員会では埋蔵文化財課を担当とし、2003年度に福重稻木遺跡第3次調査として170m²の調査を実施し、2006年度に整理作業を行った。本報告はその成果について報告するものである。

2. 調査組織

事業主体 福岡市土木局道路建設部西部建設第2課

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第1係長 力武卓治

調査担当 池田祐司

調査作業 阿比留忠義 有江笑子 井上八郎 上野道郎 海津宏子 金子由利子 下司照枝

指山歌子 柴田勝子 永島重俊 平井和子 広瀬梓 堀川ヒロ子 門司弘子 安河内史郎
吉川春美

II. 立地と環境

福重稻木遺跡は、早良平野西部の室見川と十郎川に挟まれた沖積扇状地上に立地する。周辺の標高3.5mから4.5m付近では、西から石丸古川、拾六町平田、福重稻木遺跡の分布が確認され、突帯文期から弥生時代の造構、土器が共通してみられる。北側は後背湿地となり、とくに名柄川から東では姪浜遺跡がのる砂丘上までは、独立丘陵上に位置する五島古墳を除いて遺跡は確認されていない。

福重稻木遺跡の周辺は、早い時期に埋め立てと宅地化が進み、試掘等の調査例が少ない。このため詳細な遺跡分布、古環境の把握は進んでいない。拾六町平田遺跡第2次調査地点では地質、地形の検討が行われ（下山正一、磯望1993）、縄文時代前期・中期には海岸砂丘後背の塩性湿地で、縄文晩期頃は旧干潟の縁辺に位置し、弥生期までには陸化したとされる。福重稻木遺跡でも同様の状況が想定される。

拾六町平田遺跡では、これまで2次の調査が行われている。第一次調査地点は名柄川の東岸に接し、遺跡の中では西端に位置する。弥生時代前期から古墳時代始めの3面の水田跡が確認されている。第2次調査では突帯文期から弥生前期の土坑、河川、古墳時代前期から中頃の土器包含層が確認されている。

石丸古川遺跡では突帯文單純期の土器、越州窯系陶磁器が出土しているが、十郎川の自然堤防上に位置し、福重稻木遺跡とはやや立地を異なる。この自然堤防及びその延長上には下山門敷町、下山門乙女田、下山門遺跡が分布し突帯文期から前期の土器が出土している。

福重稻木遺跡は東を室見川の自然堤防に面する。西は拾六町平田遺跡に接するが境は便宜的なものである。一帯は標高4 m前後の水田が広がり、昭和50年代の埋め立て以降、さらに旧地形を伺い知ることが困難になっている。早い時期の開発と、厚い盛り土が、試掘、調査を困難なものにし、遺跡の状況把握が遅れる一因となっている。本調査は4次を数えるが(Fig. 2) いずれも未報告である。1次調査は3次調査の西側に隣接し、昭和52年に宅地造成に伴って実施した。遺構の検出はないが、突帯文、弥生時代前期の土器、杭列等が出土している。2次調査は、3次調査の西側に接する民地で住宅建設に伴い調査を行った。3次調査と継続した調査で密接に関連するため、後でも触れる。河川より弥生前期を主体とした中期前半までの土器が出土し、河川の西岸では突帯文が出土する包含層を確認した。第4次調査地点は遺跡の西端に位置し、拾六町平田遺跡第2次調査地点に近い。共同住宅建設に伴う調査で、突帯文から前期の土器が出土する浅い不整形の遺構を検出している。

福重稻木、拾六町平田遺跡は、現況では旧地形が把握できず、明確な遺跡の分布が明らかになっていない。わずかな微高地に集落が立地し、水田等の耕作地が広がると考えられるが、その実体は今後の調査に期すしかなく、宅地化が進んだ現在では困難が予想される。

拾六町平田遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第305集 1992

拾六町平田遺跡2 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第349集 1993

十郎川 福岡市早良平野 石丸・古川遺跡 住宅・都市整備公団 1982

下山正一・磯望 1993 「拾六町平田遺跡の周辺の地質と地形」『拾六町平田遺跡2』所収

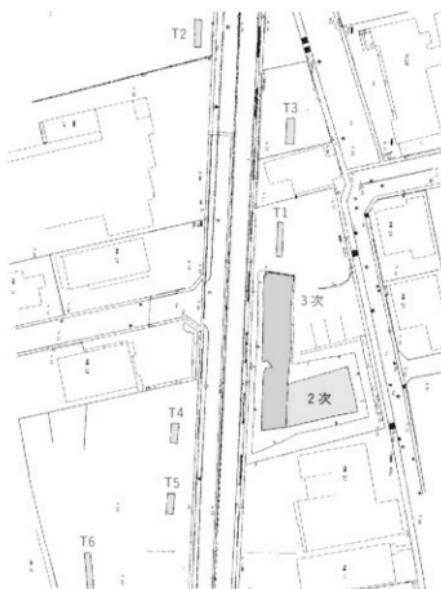


Fig. 3 福重稻木遺跡調査区位置図 (1/600)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

今回の調査は、現行の道路の両側をそれぞれ約8m拡幅する範囲を対象としている。標高は現況で4.0m前後の平地である。西側に接する2次調査に継続して実施し、調査としては一对のものである。まず、試掘調査の内容から周囲の状況を確認する。試掘はまず2次調査地点で実施され、地表下160cmで突帯文土器が多く含む層を確認した。その後道路拡幅に伴う試掘をT1からT5のトレーナー(Fig. 3)で行った。T1から流木を含む層を確認したものの、T2からT5では土器、有機物の広がりは確認できなかった。これらにより、2次調査地点に接する部分に本調査範囲を設定した。なお民間開発に伴い試掘調査を実施したT6では弥生前、中期の土器と遺構を確認している。

2次調査は住宅建設に伴い136m²について行った。調査区西側が河川堆積となり突帯文期から弥生前期の土器を主体とし、中期前半までの土器を含む。東側は微高地となり、その上にのった包含層からは突帯文期の土器がまとまった状況で出土し、炭化物の広がり(BP2450±40)を確認した。

3次調査では2次調査地点で確認した河川の西岸を検出し、その護岸と考えられるしがらみ(BP2320±60、BP2380±60)と杭列を確認した。河川の西岸で杭列が打ち込まれた層からは主に弥生前期までの土器が出土している。遺構は杭列としがらみのみである。

2、3次調査では共通した2mグリッドを使用した。2次調査は東側から調査を開始し、調査区際のA~D7グリッドで杭列を確認した時点で終了した。この杭列から西、北側を3次調査範囲として報告する。

2. 層位

Fig. 5に2次調査区の東壁および、3次調査地点まで横断する南壁、中央ベルト、北壁の土層を示した。数字で示した土層の大別は南壁土層を基本とし、平面で可能な限り広がりを確認しながら掘削し、他の土層と対照を行った。今回は煩雑を避け、2次調査部分の土層名称は大別のみを示した。

Fig. 6は3次調査区の東壁と東西土層である。土層の大別は2次調査のものを用いたが、層位の連続を直接確認できていない部分があり、不確実な点がある。またHIグリッドは土層図を作成していない。

1層 表土、客土、旧耕作土である。Fig. 6 i-j 土層1a、1b層に見られるように厚さ70cmほどの客土が成される。

2層 2aは客土前の耕作土、2bは床土で標高3.5から3.6mの水田であったことが伺われる。
2c、2dは時期は不明だが旧耕作土である。

3層 調査区全体に広がる灰褐色粘質土で砂粒が混ざり下部はシルト質で、上部では粘質が強い。
3次の北側では青みを帯びる。時期は判然としない。

4層 2次調査区西側から3次調査南側の河川土を中心に堆積する。東西両端では薄くなり、3次調査東壁でもG5グリッドから北では見られない。河川が埋没した後に溜まった灰褐色粘土で粒子が細かくよく縮まる。土器は弥生時代中期まで弥生時代前期を中心とする。

5層 河川の堆積で4、5グリッドに堆積の中心があり、南壁付近が最も厚い。暗褐色粘質土で下部ほど粘質が弱く土器、有機物が多い。部分的に粗砂、暗褐色粘土等の間層が入る。Fig. 6の東壁土層でもG、Fグリッドにその一端が見られる。

6層 河川下層の堆積で粗砂、粗砂混じりの暗褐色粘質土が互層となる。この層からは湧水が著しく、河川が深くなるA・B-4・5グリッドでは完掘できなかった。また、東岸と考えた8、10層との境



も不明瞭である。

7層 ABCD-7 グリッドに粗砂、粘質土が細かな互層を成して堆積し、中央ベルト、南壁に現れる。5層はこの堆積のものるが、6層との上下関係ははっきりしない。平面的には粗砂の広がりとしては杭列の西側にCグリッドまで見られるが、Dグリッドから北は暗灰色粘質土の下に粗砂が堆積し、細かな互層は成さない。この互層と粘質土は(以下順に7A層、7B層)、2次調査区に中心を持つSD01の流れとは時期を異にする可能性を想定して7層の枠に入れたが、土質は異なり、別物の可能性がある。2次調査区北壁Fig.5 西端の互層部分は7A層対応すると考えている。AB-7グリッドのしがらみは互層の著しい7A層部分に築かれている。河川堆積の中央部分とは時期が異なる可能性がある。

8層 河川堆積の東岸の斜面から東端の平坦面に堆積する包含層で上部は暗灰褐色、下部は暗褐色から黒褐色粘質土で所々に炭化物の広がりが見られる。AB-1・2・3グリッドに分布の中心がある。土器は突帯文土器を中心とし、廐棄された状態と考えられ、大形破片が多い。

9層 1・2・CDグリッドでは北側に向かって落ち、8層の下にやはり突帯文期の土器が出土する暗灰褐色粘質シルトが溜まる。8層と一連のものか。最下部には部分的に炭化物の広がりが見られる。

10層 河川の西岸、3区全体から西へ広がる。暗褐色粘質土で有機物を含み、弥生時代前期の土器が出土する。ABグリッド付近は厚く、一箇所で80cmの層厚を確認した。層位的には東岸の8層との関係はつかめなかったが、出土土器は新しいと考えている。

11層 IJK-4・5グリッドの東半に広がる粗砂、灰色粘質シルトの互層で有機物を含み湧水が多い。粗砂層で主に前期の土器が出土した。河川 SD01とは別の流れがあると考えられる。

12層 IJK-4・5グリッドの西側に広がる灰色粘質土および粗砂で11層に近く、一連の堆積の可能性もある。

13層 Jグリッドから北側で10、11、12層の下に広がる。良く締まった暗褐色から黒褐色粘土層で一部掘削を行ったが遺物は確認できなかった。

10層の下には、FからJグリッド付近では11層と思われるシルト、粗砂が広がるが、湧水のため確認できていない。それより南は10層に近い暗褐色粘質土が深く堆積し、それ以下の調査は行っていない。一部 Fig. 5 のg-h土層に見られるよう粗砂層を確認している。

2次調査地点の西岸では8、9層下は青灰色砂質シルトで一部粗砂等が見られる。

以上の層位の概要を繰り返す。1層は近年の客土と耕作土。2層は新旧の耕作土。3、4層は調査区全体に広がる包含層で弥生時代中期までの土器を含む。5層、6層、7層は調査区中央を南北に縱断する河川の堆積で弥生前期を主体とし中期までの土器を含む。8層、9層は河川の東岸に広がる土器包含層で突帯文土器が出土した。10層は河川の西岸を形成し主に弥生時代前期の土器を含む。11層は10層下で確認した粗砂、シルト層で河川とは別の流れもしくはその下層と考えられる。その下は13層の暗褐色粘土層が堆積する。

8層、9層は出土土器の比較から10層より古いと考えられる。しかし層名を土器の注記に使用しているため、そのまま用いた。詳細は2次調査報告次に検討したい。

3. 検出遺構

確認した遺構は河川、しがらみ、杭列である。出土土器は、後でまとめて層毎に報告する。

(1) 河川 (Fig. 4)

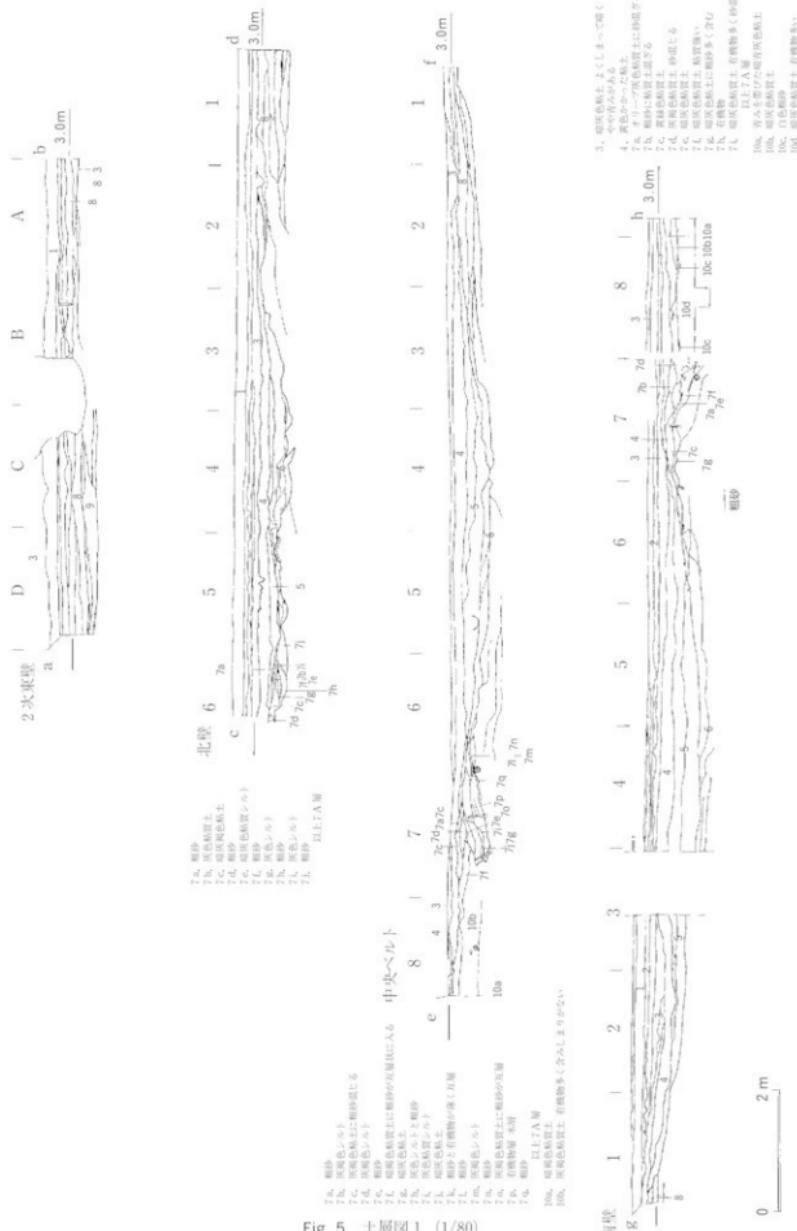


Fig. 5 土層図 1 (1/80)

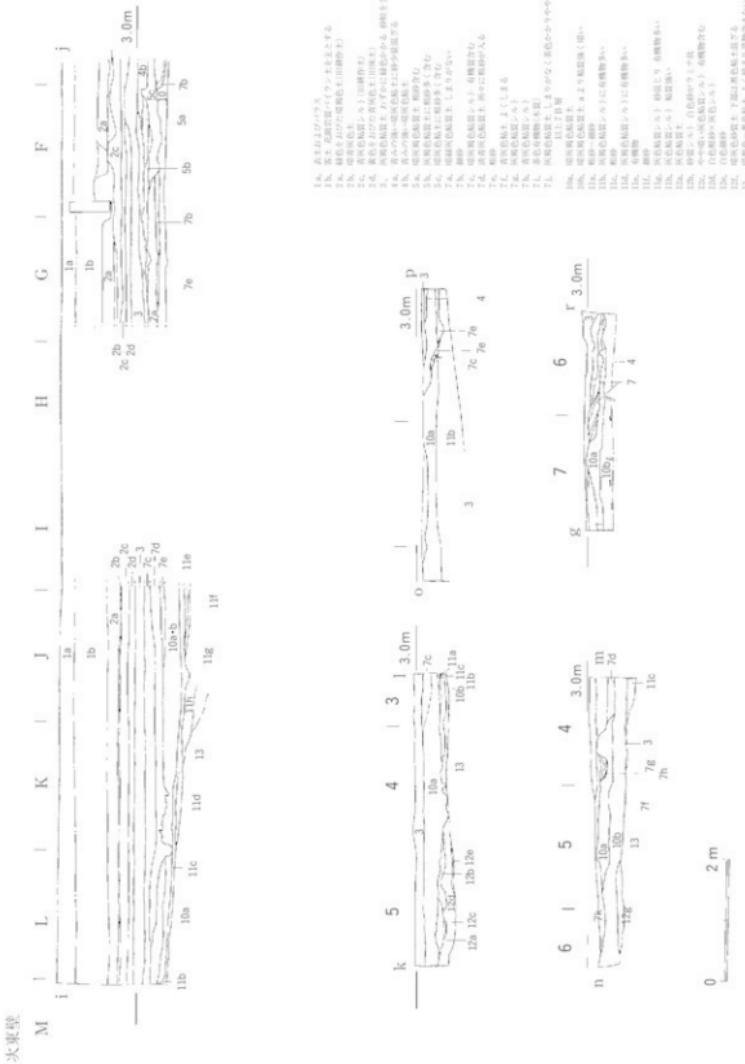


Fig. 6 土層図 2 (1/80)

2次調査区の西側と3次調査区の東半に河川が南北方向に流れる。幅約8から9mを測り、東側斜面は緩やかである。大きく見ると一つの流れだが、複数時期の流れの重なりの可能性がある。ほぼ3次調査部分にあたる7層が堆積する部分をSD02、2次調査区部分をSD01と分けて記載しておく。また、河川の流れの方向は、平野の地形から北へ流れると考えるのが常識的であろう。2次調査区内では河川堆積である5、6層が南側へ低くなるが、部分的なものと考えている。

SD01 2次調査地点西より流れの中心を持つ。A-4・5グリッドの南壁部分で深さ80cmほど掘削したが涌水のため底は判然としなかった。北側のD-4グリッドで深さ40cmを測る。埋土として5、6層が堆積する。詳細は2次調査報告時に追加したい。弥生時代前期を主とし、中期までの土器が出土した。

SD02 3次調査部分では河川の落ち、粗砂の広がりをA7グリッドからL4グリッドまで断続的大が平面的に確認した。断面ではFig.6の東西土層で確認できる。3次調査区内の河川堆積7層は、2次調査区内的SD01とはやや異なるため、別時期の流れの可能性があると考え SD02の遺構名で記載する。その堆積は、AからDグリッドでは粗砂と粘質シルトの細かな互層である7A層(Fig.5e-f土層)で、それより北のDからLグリッドでは暗灰色粘質土(Fig.6i-j, o-p土層)底に粗砂が溜まる7B層である。このような2種の埋土を7層としている。2次調査区の北壁土層(c-d)の7c層暗褐色粘質土は3次調査区のi-j土層の7a層暗褐色粘質土に対応すると考えられる。以上のSD02も互層部分と暗褐色粘土層では異なる流れの可能性、つまりSD01の強い流れの一部とも考えられるが、現地で十分な検討ができていない。

また、互層が堆積するABC-6・7グリッド部分では、SD01は緩やかにではあるが西側に立ち上がり、7層部分は西に落ちる。このことは河川SD02を別に想定する根拠の一つである。

しがらみ、杭列はこの落ちに沿って構築され、関連または影響を受けて造られたものと考えられる。

7層の出土遺物は、後に示すように突帯文から前期を主とし、若干の中期前半の壺が出土している。中期の遺物は河川堆積の性格上、また分層時の混じりの可能性もあると考えている。

(2) しがらみ (Fig. 7)

ABC-7グリッドの河川SD02西岸に沿って構築され、南側は調査区外に延びる。延長3.6mほどを検出した。平面と見透し図をFig.7に示した。見透し図はAグリッド部分1mのものである。

しがらみの構造は、西岸の上端と平行に径10cmほどの太めの木材を配し、その上に径1から2cm大の細い材を10枚本重ねて壁を形成する。これらの横木の前後には径5cm前後の杭が斜め方向に打たれる。その角度は、前面が45°から60°と立つのに対し、後方は30°前後と寝たものが多い。土圧で当初とは状況が変化していると想定される。構築順序は後方の杭を据えたのち打ち込み、下の横木を据え前面の杭を打ち込み、細い横木を編むように据えていったのであろうか。

このしがらみの周辺はFig.5のe-f, g-h土層に見られるように7層のうち粗砂と粘質土の互層7A層が堆積する。西岸に強い流れがあたって粗砂が堆積するような状況があり、その護岸目的でしがらみが築かれたとも考えられる。

また、しがらみの構成材のうち、Fig.7のw260とw226について、樹種同定と放射性炭素年代測定を行い、順にアワブキ属(BP2320±60)、タミンタチバナ(2380±60)という結果が出ている。(13頁、表2、3) 年代は想定した構築順とは異なるが誤差の範囲であろうか。

(3) 杭列 (Fig. 7, 8)

調査区を縦断する方向に杭列を検出した。打ち込み面は不明だが10層および7層掘削にともない検出し、これらの層にはば直に打ち込んでいる。材の径は様々だが、ほとんどが樹皮を残した丸杭で、



Fig. 7 しがらみ、杭列実測図 1 (1/40)



Fig. 8 桁列実測図 2 (1/40)

先端を削り尖らせている。平面的なまとまりからaからhの8列に分けて以下記載する。記録にあたっては先端まで確認することに心がけたが湧水等のため断念したものもある。取り上げにあたっては、残りの良いものについてサンプル的に持ち帰った。樹種同定等は行っていない。

a列 南端ではしがらみと重なり、8mの延長を確認した。南側にも続くと考えられる。DEグリッドのものはd列の並びの可能性もある。10層に打ち込む。材は径3から5cmのものを用いる。Dグリッドに1本だけ板材を用いている。先端は標高2.2mから2.4m付近まで達するものが多い。Fig.7の東方向からの見通しで太めの材で深く達しているもの多くはしがらみの構築材である。また、しがらみ南側からの見通しでは、杭は直に立ち、しがらみの材とは異なることが分かる。

b列 a列の東約80cmほどをほぼ平行して並び、延長8mを確認した。南側にも続くと考えられる。7層および10層に打ち込む。a列と対を成すか何らかの規制を受けて平行した箇所に構築したものと考えられるが、前者の解釈が自然であろう。径3から8cmほどの材を使用し、Cグリッドに1本のみ板材を用いている。先端は標高2.2mから2.4mに達する。

c列 b列の東約1mに併行する。延長3mを確認した。南側にも続くと考えられる。7層に打ち込む。径5から6cmほどのやや太めの材を使用し、先端は標高2.0mから2.2mに達し、a列、b列より深い。

d列 CDグリッドでa列の西約60cmに並び、北側ではa列に近づく。延長2.5mを確認した。径3から5cmの材を10層に打ち込む。先端は標高2.2mから2.4mに達し、さらに深いものもある。

e列 FGグリッドで延長約2mを確認した。10層に打ち込む。列にややばらつきがある。a、b列の延長の中間に位置する。径3から5cmほどの材を用い、先端は揃って標高2.3mまで達し、列からずれるものは浅い。

f列 FGグリッドで延長3mを確認した。他の列と比べ、延長が東を向く。7層に打ち込む。2本は径5、6cm大の材で標高2.1、2.2mに達するが、他は径1から3cmの細い材で先端は深さ2.5mまでである。2列が重なった状況の可能性がある。

g列 HからJグリッドで延長3mを確認した。a列の延長上にあり、方向も一致するが、間に8mのブランクがある。10層に打ち込む。径3から5cmの材を使用し先端は標高2.4から2.5mにそろう。また、杭の間隔は間が空く箇所があるが30cmから40cmと一定である。

h列 g列の東約1mを併行する。延長1.2mを確認した。b列の延長上に位置し、方向も一致するが約8mのブランクがある。径5cmほどの材を10層に打ち込み、先端は標高2.3mに達する。

以上の杭列のうち、a、b列、g、h列はそれぞれ対を成し、同じ延長の可能性が高い。その前提に立つと、b列が7層に打ち込んでいることから、少なくともSD02が埋没した後に構築されている。その用途としては、堤防、畦等の補強などが考えられる。時期は不明だが、SD01が存在している時期に、護岸として構築された可能性もある。

築かれた時期にはばらつきも考えられるが、7層が溜まった後である。

4. 出土遺物

出土した遺物は土器、土製品、石器、木器で、土器が量的に多い。土器は出土した層毎に図示するが、河川堆積であること、掘削時の分層のぶれ等から混じり込みも多いと考えられる。土製品、石器、木器は一括して報告する。

(1) 土器

口縁部は傾きが不明、器面の摩耗が激しいものを除いて、底部は残存が $1/4$ に満たないものを除いて図化し掲載した。文様を施しているものでは水平沈線1条のものについては図化していないものがある。異なる層出土の破片が接合したものは下位の層位に入れた。また、彩文土器については図版組の関係上、最初に一括して掲載し、13頁の表1に顔料の分析結果を示した。

彩文土器 (Fig. 9、巻頭図版1、3)

橙色が強い赤色の幅2mm前後の線で文様を描いている。分析の結果2が水銀朱である以外はベンガラという結果が出ている。JKグリッドからの出土が多い。

1、2は7層出土。1は壺の頸部から胴部への屈曲部で2mm幅の縱方向の線を3条施す。精良な胎土で外面研磨で暗褐色、内面は丁寧なナデで灰色を呈す。2は壺の底部で内面に水銀朱が見られる。彩文ではない。薄く明るい発色で他の彩文とは異なる。胎土には砂粒が多く含み、外面には砂粒の動きが残る。3から9は10層出土で7以外は壺である。3、4、5は黄灰褐色を呈し、外面研磨調整で胎土に砂粒を多く含み、同一個体の可能性がある。3は4の弧から復元した。3には頸上部に3本の併行線を施す。4には2本が確認できる。5は有軸羽状文の下に3本の平行線が確認できる。器外面は暗褐色を呈し彩文は見えにくい。内面は茶褐色を呈す。6は胴上半で6条のV字文が確認できる。7は刻目突帯文土器で摩滅した器面の赤みを帯びた部分について分析し、顔料は検出できなかった。彩文土器ではないが、分析例としてここに掲載した。8は彩文ではないが外面全面と内面の一部に赤色顔料を施し、橙色を呈す。夜白系の壺の頸部と考えられる。9は有軸羽状文の下に3本の平行線を施す。外面暗褐色で横方向の研磨痕が明瞭に残る。5と類似するが、平行線の間隔が異なる。内面の霧開気は似ている。10、12から15は11層出土である。10は頸上部に2本の平行線と、4本の縦線が見られる。外面研磨調整で茶褐色を呈し、内面ナデ調整で黄茶褐色を呈す。11は頸部の径 $1/4$ が残存する。器面が荒れ気味ではっきりしないが、頸部上端に2本の平行横線を施し、斜め方向に4条の平行

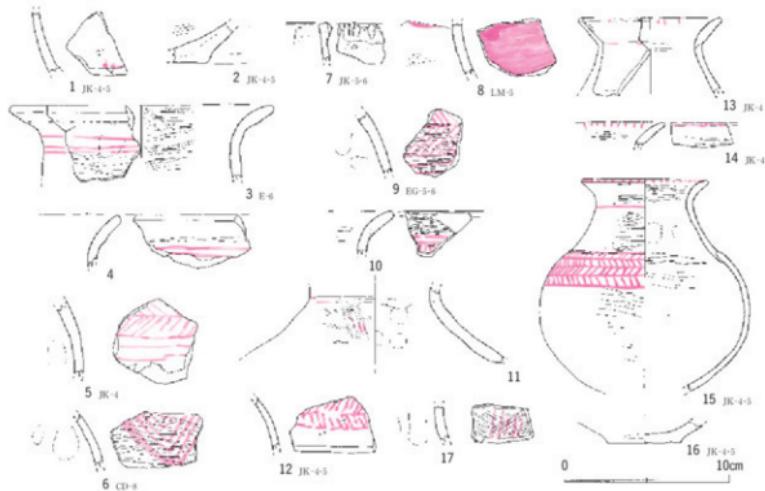


Fig. 9 彩文土器実測図 (1/3)

表1. 顔料分析対象資料とその結果

試料番号	顔料成分	分析条件	分析結果	検出限界	
1 JK-4-5 7M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	09-1-pd 09-1-9d	支線上顔料部分 高濃度部分	高い Fe ピークを検出。 支線上顔料部分 高濃度部分
2 JK-4-5 7M	エジプト(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	12-1-pd	顔料粒部分	支線上顔料部分 高濃度部分
3 E-6 10M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	6-pd		支面上機器上、支線部に 弱めのビーグを検出。 支面上機器上、支線部に 弱めのビーグを検出。
4 E-6 10M	耐光土顔(顔料)	褐色および赤色を帯びた赤色の顔料 子。粒子の焼きは無い。	02-1-pd 02-1-9d	支線上顔料部分 被覆面塗り層部分	高い Fe ピークを検出。 支線部に弱めのビーグを検出。 K, Ca のビーグが相対的 に弱め。
5 JK-3-6 10M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	09-1-pd 09-1-9d	支線上顔料部分 高濃度部分	Fe を検出される他の顔料 に比してさほど弱めない Fe のビーグを検出。
6 ADD-8 10M	耐光土顔(顔料)	褐色および赤色を帯びた赤色の顔料 子。粒子の焼きは無い。	02-1-pd 02-1-9d	支線上顔料部分 高濃度部分	高い Fe ピークを検出。
7 JK-3-6 10M	耐光土顔(顔料)	大学の赤色系は上顔料が赤色に染め てある。下顔料は白い。上顔料の 焼きは無い。下顔料の焼きは ある。	09-1-pd 09-1-9d 08-1-pd	黒色顔料部分 被覆面塗り層部分 青色の顔料粒子見え る部分	支線部に弱めのビーグを 検出。 K, Ca のビーグが相対的 に弱め。
8 LM-5 10M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	03-1-pd 03-1-9d	外顔料部分	高い Fe ピークを検出。
9 LM-5 10M	耐光土顔(顔料)	青色と黄褐色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	01-1-pd 01-1-9d	支線上顔料部分 高濃度部分	高い Fe ピークを検出。
10 LM-5 10M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	01-1-pd 01-1-9d	支線上顔料部分 高濃度部分	高い Fe ピークを検出。
11 LM-5 10M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	01-1-pd 01-1-9d	支線上顔料部分 高濃度部分	高い Fe ピークを検出。
12 JK-4-5 11M	耐光土顔(顔料)	褐色および赤色を帯びた赤色の顔料 子。粒子の焼きは無い。	09-1-pd 09-1-9d	支線上顔料部分 支線部	高い Fe ピークを検出。 支線部に弱めのビーグを 検出。
13 JK-4-5 11M	耐光土顔(顔料)	褐色および赤色を帯びた赤色の顔料 子。粒子の焼きは無い。	09-1-pd 09-1-9d	支線上顔料部分 支線部	高い Fe ピークを検出。 支線部に弱めのビーグを 検出。
14 JK-4-5 11M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	01-1-pd 01-1-9d	口輪内面大根・顔料部 口輪内面背景の顔料 高濃度部分	高い Fe ピークを検出。
15 JK-4-5 11M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	02-1-pd 02-1-9d	口輪内面大根・顔料部 高濃度部分	高い Fe ピークを検出。
16 JK-4-5 11M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	06-1-pd 06-1-9d	支線上顔料部分 高濃度部分	高い Fe ピークを検出。
17 JK-4-5 11M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	06-1-pd 06-1-9d	支線上顔料部分 高濃度部分	高い Fe ピークを検出。
18 JK-4-5 11M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	06-1-pd 06-1-9d	支線上顔料部分 高濃度部分	高い Fe ピークを検出。
19 JK-4-5 11M	耐光土顔(顔料)	褐色を帯びた赤色の顔料子。粒子の 焼きは無い。	11-1-pd	顔料規格部分	高い Fe ピークを検出。

表2. 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料番号	試料の質	樹種	補正年代 BP	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
226 材	アワブキ属		2320±60	-29.6	-	IAA-478	
260 材	タイミンチバナ		2380±60	-26.7	-	IAA-479	

1) 年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用。

2) BP 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

表3. 暈年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暈年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
226 2329±55	cal BC 505 - cal BC 461 cal BC 451 - cal BC 439 cal BC 428 - cal BC 421 cal BC 414 - cal BC 355 cal BC 288 - cal BC 257 cal BC 247 - cal BC 233	cal BP 2,455 - 2,413 cal BP 2,401 - 2,389 cal BP 2,378 - 2,371 cal BP 2,364 - 2,305 cal BP 2,238 - 2,207 cal BP 2,197 - 2,183	0.152	IAA-478		
260 2380±57	cal BC 755 - cal BC 720 cal BC 533 - cal BC 529 cal BC 522 - cal BC 391	cal BP 2,703 - 2,670 cal BP 2,488 - 2,479 cal BP 2,472 - 2,341	0.141 0.035 0.024	IAA-479		

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4

(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

線を描く。外面はナデ調整で下調整の擦痕が見える。灰茶褐色を呈す。胎土は精良で砂粒は少ない。12は有軸羽状文の下に横線を入れる。外面は研磨調整で暗褐色から黒色を呈し、内面は横なで調整で淡黄褐色を呈す。胎土は細かく砂粒をほとんど含まない。15に似るが文様の大きさが異なる。13、14は同一個体と考えられる。口唇部には横向方向の横線、口縁部内面には縦方向の短い線を密に施す。外面頭部上端には横向方向の線を1本描く。内外面とも研磨の後に丁寧なナデ調整を施し外面には光沢がある。暗灰褐色から黒褐色を呈す。胎土は細かく、砂粒をほとんど含まない。15はJK-4・5グリップで小片が散在して出土した。口縁部の3/4、胴上半の1/2弱、下半の一部が復元できた。図は復元的に作成した。口唇部に横向方向の線を施し、内面まで短い縦線を密に施す。頭部上端には幅広の横線を一条施す。胴部上半には2単位の有軸羽状文とその上下に横線を施す。胴部文様は横向方向の線の後に羽状文を描いている。外面と内面上部は横向方向の丁寧な研磨調整で光沢があり黄色を帯びた暗褐色を呈す。内面頭部は横向方向のナデ、胴部との接合部から上部は丸みを帯びた工具で横向方向の削り調整、中位から下部は横向方向のナデ調整である。胎土は細かく砂粒をほとんど含まない。全体に丁寧な作りの土器である。16は壺の底部で15と同じ部分からの出土で胎土が近いことから同一個体の可能性があると考え一緒に示した。内面の色調、器壁の厚さが異なり別個体の要素もある。17は出土地点不明。5本の平行縦線を施す。外面は横向方向の研磨調整で茶褐色、内面は指押さえを施す。天地逆の可

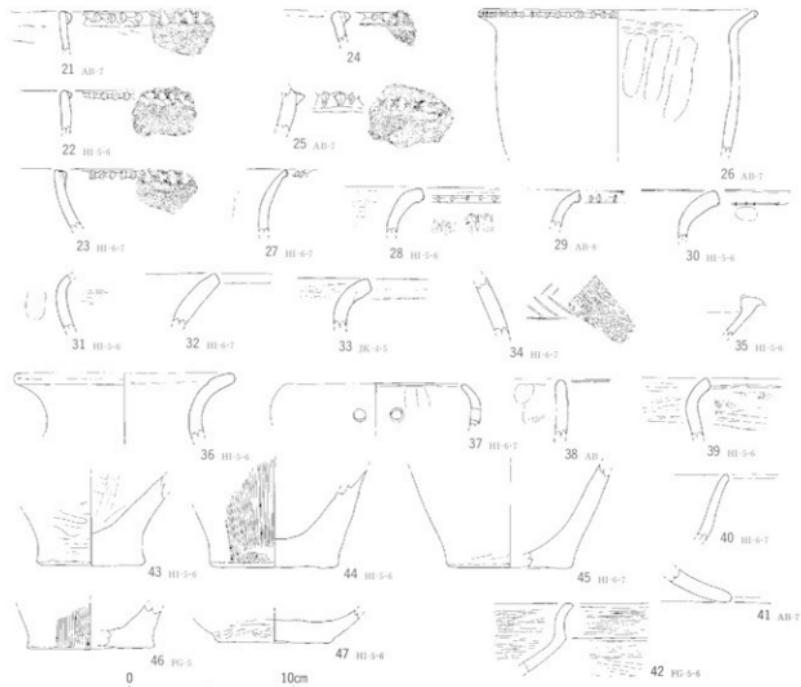


Fig. 10 4層出土土器実測図 (1/3)

能性がある。

4 層出土土器 (Fig. 10)

21から47は4層出土である。21から24は刻目突帯文系の甕でヘラ状工具で刻目を施す。24は口唇部を厚く面取し前期的な形態である。25には深い刻目を施す。26から30は外反口縁の甕で口唇部に浅い刻目を施す。26は1/8からの復元で内外面に炭化物が付着する。外面、内面胴部はナデ調整を施す。27はナデ調整の外面に炭化物がわずかに付着する。28には刷毛目が見られる。

31から36は壺である。31は夜白系の壺で内外面に赤色顔料が見られる。32は外面肥厚の口縁で小さな段を有す。34は浅く鋭いヘラ描き沈線による無軸羽状文の下に沈線を施す。35は鈍先形口縁かと考えたが器面荒れのため不明である。36は1/7からの復元で内面にわずかに段がある。外面は横方向のナデ。37は無形壺か。焼成前の穿孔が一つある。1/7からの復元。38は深鉢状の器形で外面は荒れて調整不明、内面は削りのちナデである。39は外面を刷毛目、横ナデの後に横方向の研磨を施しており鉢とした。40はわずかに屈曲し外反気味の口縁で荒れた外面には化粧土または赤色顔料がみられる。41は傾きから高環等の脚と考えた。42は鋭く屈曲する浅鉢で内外面に横方向の研磨調整を施す。43から46は甕の底部である。43は逆台形に近い形態で外面は粗い研磨調整を施す。内外とも黒色を呈す。44、46は外面に刷毛目が明瞭に残る。45は外面ナデ調整で内面に炭化物が付着する。47は壺で外面は横方向の研磨調整である。

7 層出土土器 (Fig. 11~15)

48から209は7層出土土器である。おおよそではあるがABCDグリッド出土のものは主に粗砂と粘質土の細かな互層7A層、EからJグリッド出土のものは主に粘質土7B層からの出土である。

48から78は刻目突帯文系の甕である。前期後半の突帯を持つ甕もここに含めた。調整は条痕、削り、ナデ調整を横方向に施し、暗褐色から茶褐色の暗めの発色のものが多い。刻目は特にふれる以外は縦方向にヘラ、棒状と考えられる工具で施している。48は口唇部より若干下がった位置に、厚い突帶に大降りの刻目を施す。外面は横方向の削り状の調整を施し、淡黄茶色の明るい発色である。以下は52を除いて口唇部に接するか、被さるように突帯を添付する。また、49は内外面に貝殻条痕調整を施し、突帯には細い刻目を深く入れる。50は外反口縁の甕である。外反が短く、外面は削り、条痕を横方向に施し、暗褐色で暗い発色を呈すためここで取り上げた。51、52、53の突帯はわずかに口唇部から下がる。52は器壁が薄く、刻目は棒状工具により下から上方に施す。54、56は口唇部と突帯上面と一緒に横なでし、ヘラ状工具で横方向に刻目を入れる。56は外面の削り状の調整が顕著である。57は斜め方向に大降りの刻目を入れる。58の突帯は不整形で刻目が細く極浅い。器面は淡橙色を呈す。59は口唇部を面取し、刻目は浅い。60は棒状工具で深い刻目を施す。61は幅広の突帯に細く浅い刻目を施す。灰白色を呈す。62は口唇部に被さるような大降りの突帯に細く深い刻目を施す。63から70は口唇部に横ナデを施し面取する。71から73は高い突帯を施し口唇部と共に上端が面を成す。刻目は小ぶりで、71は刺突、72、73は横方向に施す。72、73は口縁下に刻目突帯を持つ。前期後半から末のものである。74から81は2条突帯の下段部である。74は口縁部までは外反気味に立ち上がり、大降りの刻目を施し以下より古手の特徴を持つ。75は外面に幅3cmほどの粘土の動きが残る。79、80、81は口縁部が外反口縁になる。80は外面に縦方向の刷毛目が残る。82は器面荒れのため詳細が不明だが深鉢状の形態を持つ。

83から115は外反口縁の甕である。106までは口唇部に刻目を持つ。刻目は口唇部全面に施すものと下端に施すものがあり、ヘラ状工具で横方向に刻むのがほとんどである。器形は83、84、89から99のように胴部が張らないものと、85、86、87、101のように胴部が膨らむものがあり、後者の方が口縁



Fig. 11 7 层出土土器实测图 1 (1/3)

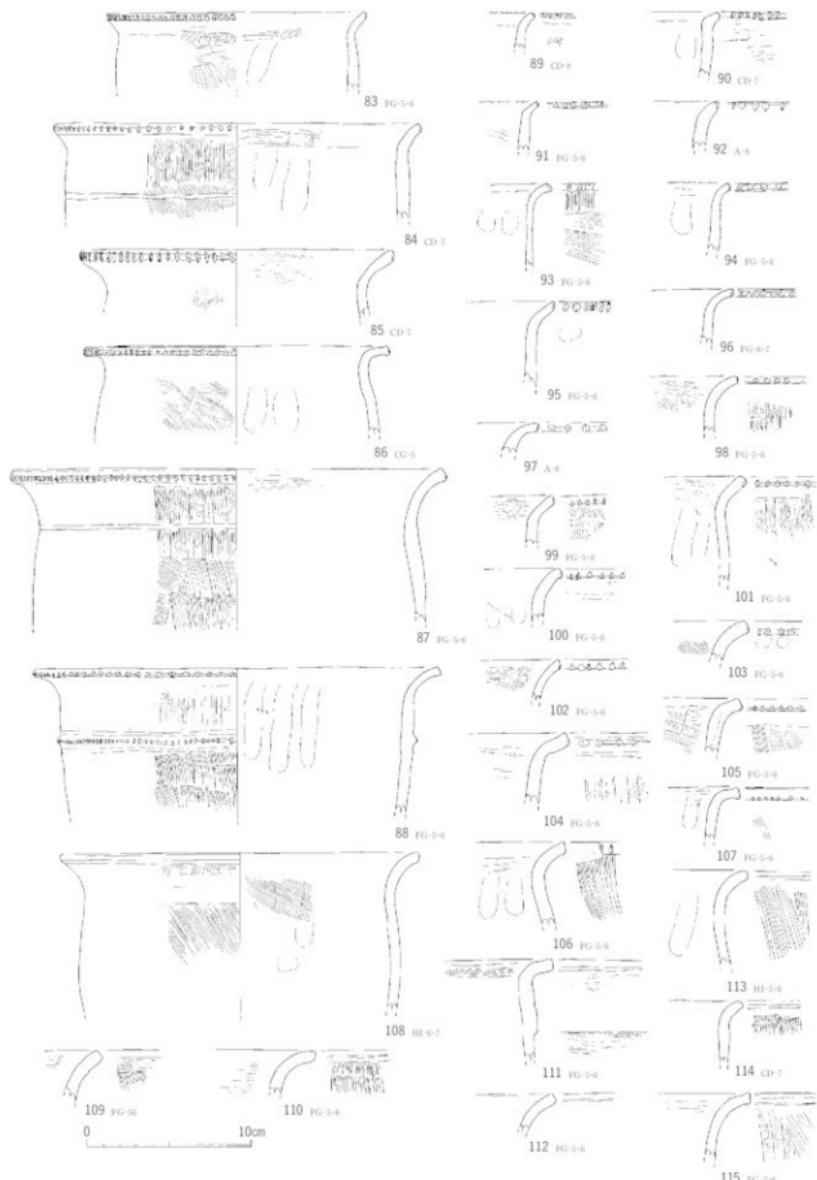


Fig. 12 7層出土土器実測図2 (1/3)

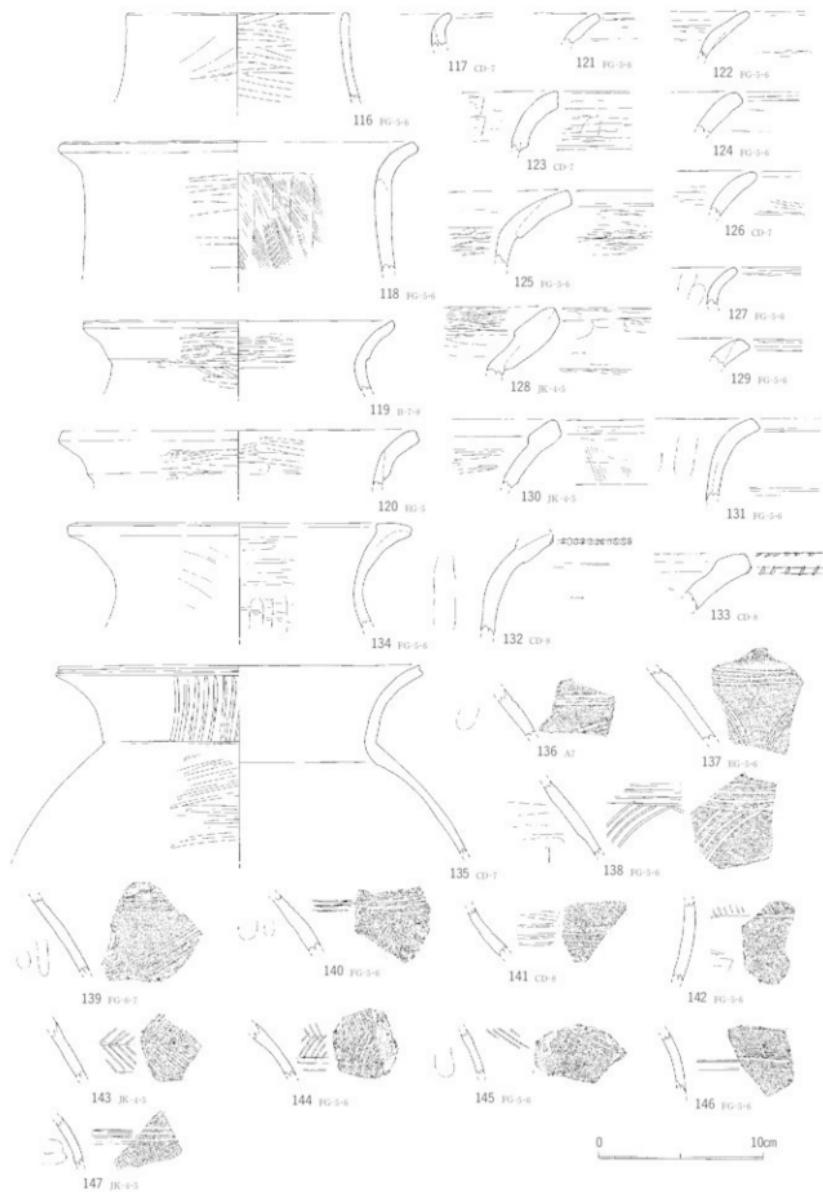


Fig. 13 7 層出土土器実測図 3 (1/3)

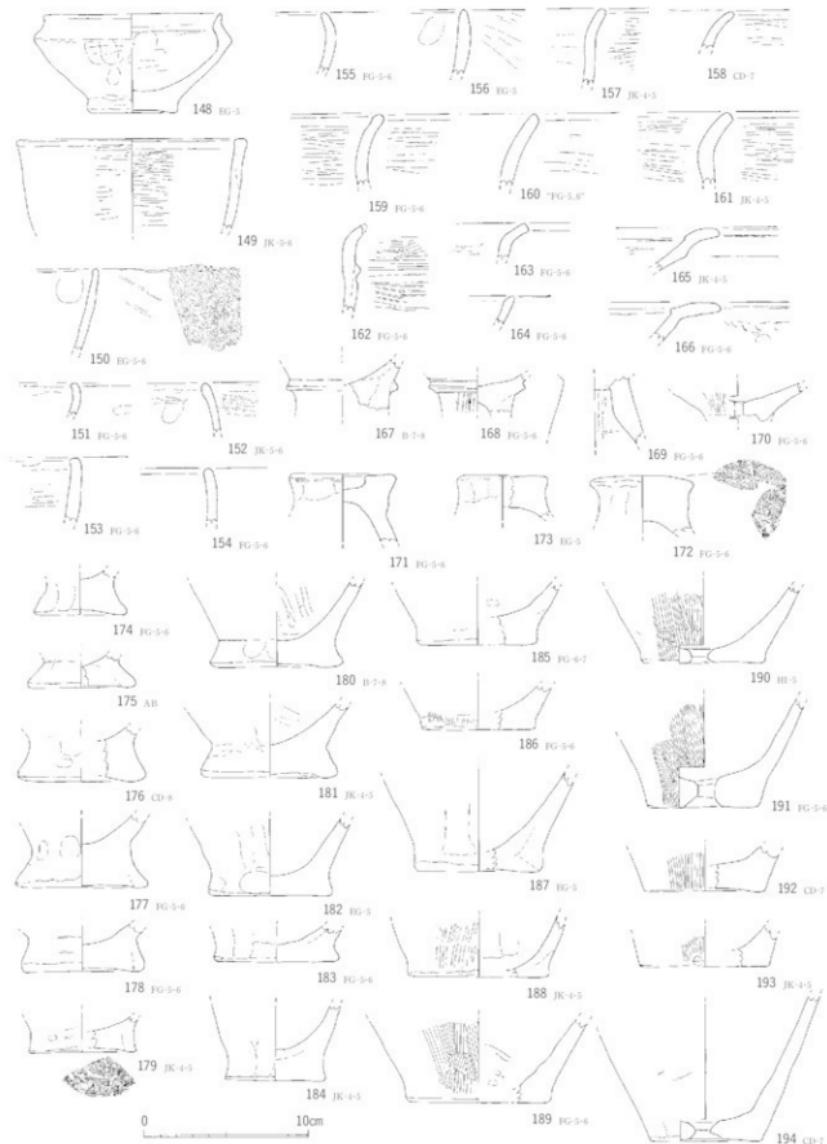


Fig. 14 7層出土土器実測図 4 (1/3)

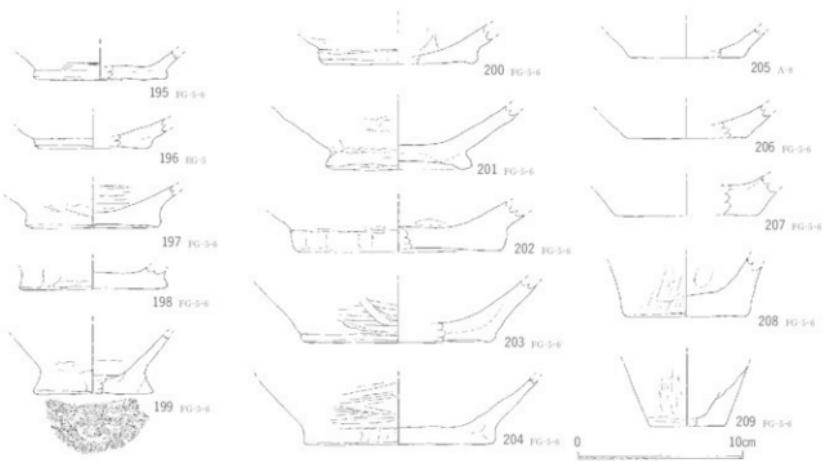


Fig. 15 7層出土土器実測図 5 (1/3)

部の外反が大きい。口縁部から底部へ直線的にすばまるものはない。84、87には口縁下に浅い沈線が一条巡り、88には突帯を添付し刻目を施す。器面調整は、外面胴部は縦方向または斜め方向の刷毛目調整、口縁部は横ナデを施すものが多い。そのなかで93の外面の刷毛目は口縁部は縦方向、胴部は横方向に近い斜方向である。内面は口縁部に横方向の刷毛目調整、胴部はなでおよび指おさえを施すものが多い。外面は煤けるものがほとんどで色調は暗い。86、92、98、104から107には若干の炭化物が付着する。85、87は煤が付かず淡茶色の明るい発色である。88までは口径復元を行ったが、口径の1/6から1/7の破片である。108から115は口縁部に刻目を施さない。口縁部の外反が強いものが多い。調整は外面は縦方向の刷毛目を施し、口縁部の横なでは弱いものがほとんどである。110には口縁部横なでは見られない。111は口縁下に顯著な段を有し、その上はナデ調整、下は横方向の削り状の擦痕が残る。口唇部は横なでによる面取をするものとしないものがある。

116から146は壺である。116から118は夜白系。116は内外面に研磨調整を施す。117、118は内外面に赤色顔料を塗布する。118は内面の指押さえと刷毛目調整が顯著である。119から126は口縁部外面を肥厚する。横方向の研磨、ヘラナデ調整を施すものが多い。122は高环の脚の可能性がある。124は外面に赤色顔料が見られる。125は粗いナデ調整で顯著な段を有し外面が煤ける。128、130は内外面に段を有する。130はナデ調整の下の刷毛目が見られる。131は横方向のナデ調整を施し頭部に浅い沈線を一条巡らす。133は口縁端部の内外面に刻目を施す。132も同様の形態と考えられ、外面に緩やかな段状部がある。134は鋸先口縁、135は広口口縁の中期の壺である。いずれも研磨調整で135の頭部外面には縦方向の暗文が見られる。136から147は胴部に文様があるものを集めた。136から139は2から4本の沈線で複線山形文を描く。頭部との境には水平沈線が巡る。138では水平沈線の後に山形文を描いている。140、141は胴部と頭部の境の水平沈線である。143は沈線で有軸羽状文を、144は木口または二枚貝端部の押圧で無軸羽状文を横線の後に描く。142、145は斜方向の平行沈線が見られ羽状文の可能性がある。146、147は胴部に平行横線を描く。

148から164は鉢である。148は夜白系の浅鉢で粗い研磨、ナデ調整で粗い成形である。ほぼ完形である。149は直口で横方向の研磨を施し、外面には薄い橙色の顔料が見られ胎土は細かい。小片で復元口径は不確かである。150は粗製の楕円土器で薄い器壁の外面には擦痕が見られる。151から156は口縁部が内湾する。152から153は研磨を施し、他はナデ調整である。157から163は口縁部が外反する。横方向の研磨または丁寧なナデ調整を施す。158、159の内外面には赤色顔料が見られる。163は壺の可能性がある。165、166は高壺の口縁部で165は淡橙色、166は黒褐色を呈す。167から170は高壺の脚部と壺の接合部である。いずれも破片からの復元。171から173は蓋とした。

174から194は甕の底部である。174から184は台形から台形気味の形態を持つ。器面調整はナデで、外面の底は若干の上げ底が多く、削りまたは削りの後ナデを施す。185から190は底から若干の立ち上がりを持つ。185、186、187はナデ調整で186に刷毛目がわずかに見られる。188から193は外面を縦方向の刷毛目調整で仕上げる。194はナデ調整である。190、191、194には焼成後の穿孔が成され、191、194の内面には炭化物が付着する。195から209は壺の底部で鉢、浅鉢のものもある。195から201は台形または円盤状の底部形態を持つ。ナデ調整仕上げで特に丁寧な調整ではない。201は外面に赤色顔料を施している。199の外面には若干の煤が付着する。202は高めの立ち上がりを持ち粗いナデ調整仕上げである。203、204は外面が横方向研磨調整で204には赤色顔料を施す。205から208は直線的に胴部に広がり、外面にナデ調整を施す。209は外面は削り調整で底が薄い。径が小さく小型の器であろう

10層出土土器 (Fig. 16~21)

210から244は突帯文系の甕である。210から212、214から217は突帯を口唇部からやや下がった位置に貼付する。刻目はヘラ状工具で横方向に施し、暗い色調のものが多い。210は外面に縦方向の刷毛目、内面に横方向の擦痕が残る。211はナデ調整で突帯が細く高い。212は低い突帯で外面は横方向の削り調整である。216にも削り調整が見られる。217は口唇部を欠く。刻目は小さい。213は突帯を持たないが刺突により刻目を施すためここで扱った。218から228は突帯が口唇部に接するか被さる。突帯は大小あるが、ヘラ状、棒状工具を縦に引いたり、押し当てることで刻目を施すものが多い。218は小ぶりの突帯に浅く小さな刻目を下から上へ刻む。器面はナデ調整。223、227外面には炭化物が付着する。220、221はヘラ状工具で横方向に刻む。222、223には横方向の削り調整が見られ、他はナデ調整である。223、226の内面には粘土帯の接合痕が残る。229は高い突帯を持ち、その上面と口唇部への横ナデが顕著である。231、235、236、237は外面に縦方向の刷毛目調整を施し、他はナデ調整である。234は内面に横方向の刷毛目が明瞭に残る。231、232、235、236の外面は煤ける。刻目は232にヘラ状工具を深く刺突気味に施す他は小さく浅い。238から244は胴部突帯部である。238は指で幅広の刻目を施し、239は棒状、240はヘラ状工具で押圧状に刻む。器面はナデ調整である。241から244は外反口縁の可能性がある。241、244には縦方向の刷毛目がはっきり残る。241外面には炭化物が付着する。

245から273は外反口縁の甕である。245から247、249は1/7、248は1/4の破片からの復元である。245は縦方向の刷毛目の後にナデ調整。246は口縁下が張り、擦過による横方向の調整を施し突帯文的。口唇部下端には浅く細い刻目を施し、淡橙色を呈す。247はナデ調整。248は口唇部刻目がなく、外面の縦方向の刷毛目、内面口縁部の横方向の刷毛目が顕著である。249は口縁下に刻目突帯を持ち、外面は縦方向の刷毛目調整で炭化物が付着する。250から268は外反の強いものを見た。外面を縦方向の刷毛目の後、口縁部を横なでするものが多く、ほとんどが煤ける。刻目はヘラ状工具で横方向に施すものが多い。251は口縁部に横方向の条痕状の調整痕が見られる。253、256、257は外面ナデ調整である。257には炭化物が付着する。265、266の刻目は極小ぶりで浅い。267は口唇部に強い横なでの後、口縁下端に大降りの刻目をヘラ状工具により横方向に施す。256、268の口縁下には刷毛目調整の



Fig. 16 10層出土土器実測図 1 (1/3)



Fig. 17 10層出土土器実測図 2 (1/3)

後に浅い沈線を施す。269から273は外反する口縁部に刻目を持たない。269は外面が橙色を帯び鉢かもしれない。270は幅広の刷毛目痕が残る。273の口縁部は薄く仕上げ、小ぶりの口縁下突帯にも刻目はない。

274から337は壺である。274から276は丸みのある口唇部で肥厚等はない。274は1/8からの復元で外面横ナデ調整、内面は粗い研磨である。275は強い横なでを施す。276は口縁横ナデで頸部外面には刷毛目が残る。277口縁外面を肥厚し、内外面に粗い研磨調整を施し、暗褐色を呈す。278は壺の底部で内面ナデ、外面は斜方向の研磨調整で暗褐色を呈す。調整、色調が277に似る。279は口縁部外面横なでで若干の厚みを持たせる。頸部以下は横方向の粗い研磨調整で頸部にわずかに刷毛目が残る。内面は口縁部は横方向の研磨、頸部に横方向の刷毛目が所々見られ、他は唯なナデ調整である。外面の胴部上部には沈線により無軸羽状文を2列施し、その上端の頸部と胴部の境に2本の横線、下端の胴部最大径付近にも2本の横線を施す。上端の横線の後に羽状文を施す。外面淡橙茶色を呈す。280は口縁部下をわずかに肥厚し、内面に平坦面を造り段を持つ。口唇部は強い横なでにより窪む。外面は口縁部に刷毛目が見られ、頸部と内面は横方向の研磨調整を施す。暗灰褐色を呈す。281も内外間に段を持ち、横ナデ調整を施し灰白色を呈す。282から284は口縁部が小さく外反し、頸部が直線的に伸びる夜白系の壺か。282は横なで調整で鉢の可能性もある。283は外面横研磨、内面擦痕調整で灰褐色を呈す。284は屈曲部に擦痕の木口痕が残り外面ナデ、内面研磨調整である。285から303までは外面を肥厚または調整で段を持つ。横方向のナデまたは研磨調整を施す。288、289、291は内外面に赤色顔料を施す。298外面には斜方向の刷毛目を施し、ヘラ描き状の横線がある。304から307は横なで調整で外面が煤ける。308から310は横方向の研磨調整で309の外面には赤色顔料が見られる。311は急に屈曲し横ナデを施す。312、313は口唇部が強い横なででくぼみ、上下端部に刻目を施す。312は外面に段を有す。314は未発達な鋤先口縁と考えられ、外面は丁寧なナデ、内面は横方向の刷毛目を施す。315から336は文様を持つ胴部で特に記さないものは沈線による。315、316は頸部と胴部の境に横線を施し山形の弧状文を施す。317は胴部最大径部が屈曲しその下に横線、上に直線で山形文を施す。318から320は胴部に横線を描き、その上に斜線を描く。山形になるのだろうか。218の沈線は太く深めである。321は細い斜線で羽状文か。322から324は無軸羽状文を施す。323の沈線は細く浅く、324は深く描く。325から328是有軸羽状文を描く。325、328は沈線で描き、326は2枚貝、327は木口の押圧による。いずれも横線の後に羽状文を描く。329は狭い横線の間に斜方向の短く太めの線を描く。330、331は横線と斜線で羽状文であろうか。332から336は横線を描く。335は方向不明である。337は頸部と胴部の接合部で外面に浅い沈線が巡り、外面には赤色顔料を施す。338は外面に刻目突帯を施す。器面の曲面から壺と考えている。

339から363は鉢または椀形の土器である。339から342は屈曲して外反する浅鉢と考えられる。339は研磨調整で器面は荒れる。344から348は内湾気味で椀形を呈す。343は1/8弱の小片からの復元。343、347、348は横方向の研磨調整。345は外面はナデ、内面は擦痕が明瞭に残る。346は内外に擦痕が見られる。349は傾き、内外が不確実。350は外面は櫛刷毛目の後にナデ、内面は細く粗い研磨で壺の可能性もある。351から359までは外反気味の口縁部である。351は外面を丁寧なナデ、352は内外に刷毛目のち研磨調整、353は内外研磨を施す。355は直線的に外反しナデ調整である。355は内面に丸い段を持ち研磨調整を施す。356は口縁外面を肥厚し、外面と内面上部に赤色顔料を施す。357は緩やかに浅鉢状に屈曲する。358はナデ調整で小さく鋤く外反する。359、360は直口の口縁部でナデ調整を施す。小片のため傾き不明。361は器壁が厚く外面研磨、内面擦過が見られる。362、363は小片で不確実だが強く傾くようである。362はナデ、363は外面刷毛目となで、内面はナデ調整である。364、365は

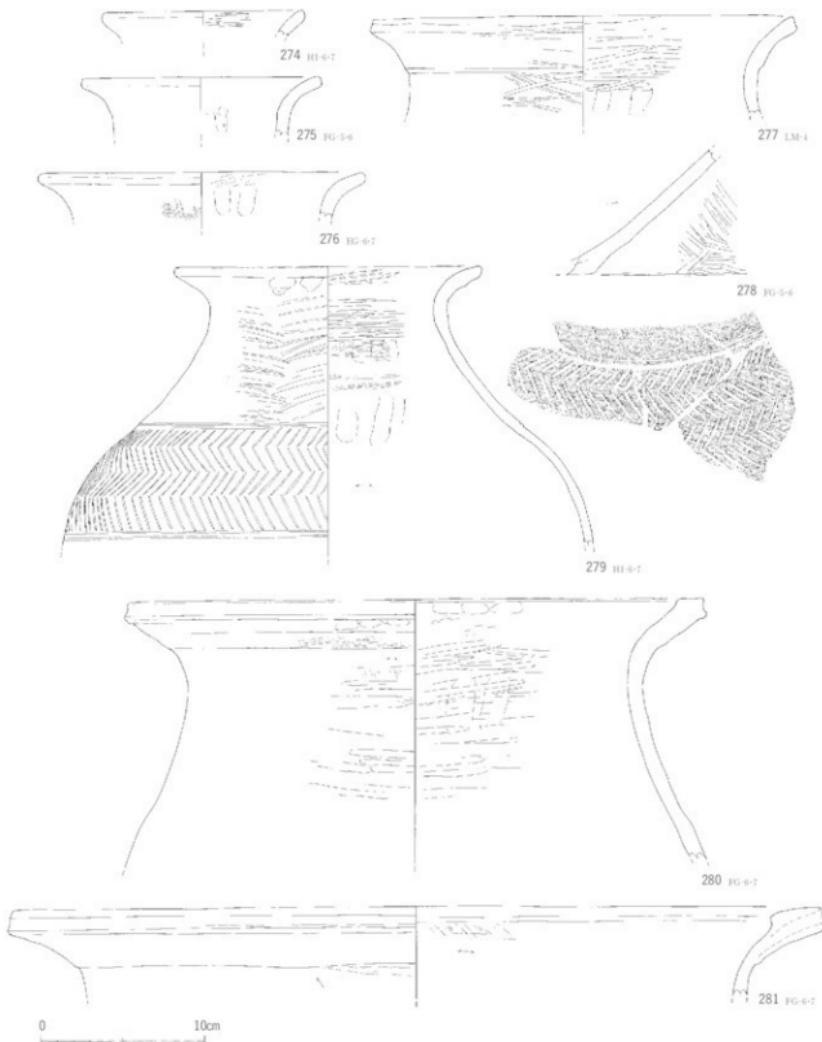


Fig. 18 10層出土土器実測図 3 (1/3)

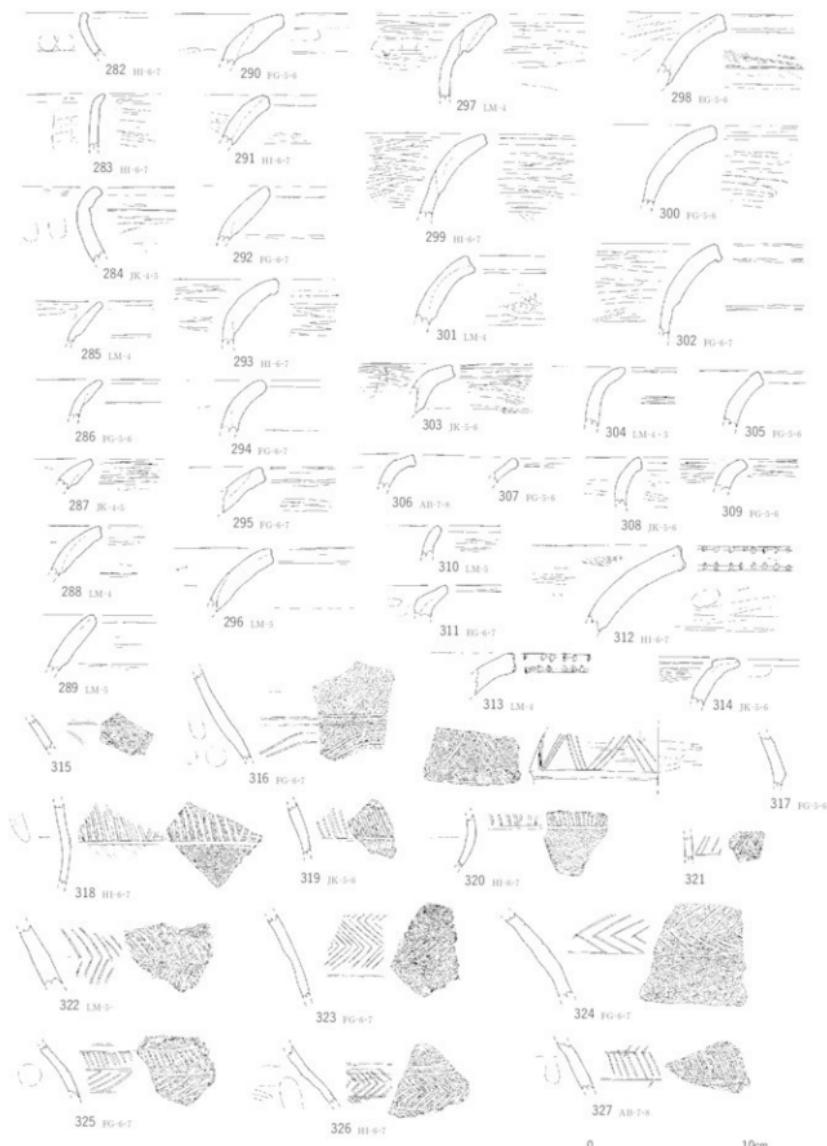


Fig. 19 10層出土土器実測図 4 (1/3)

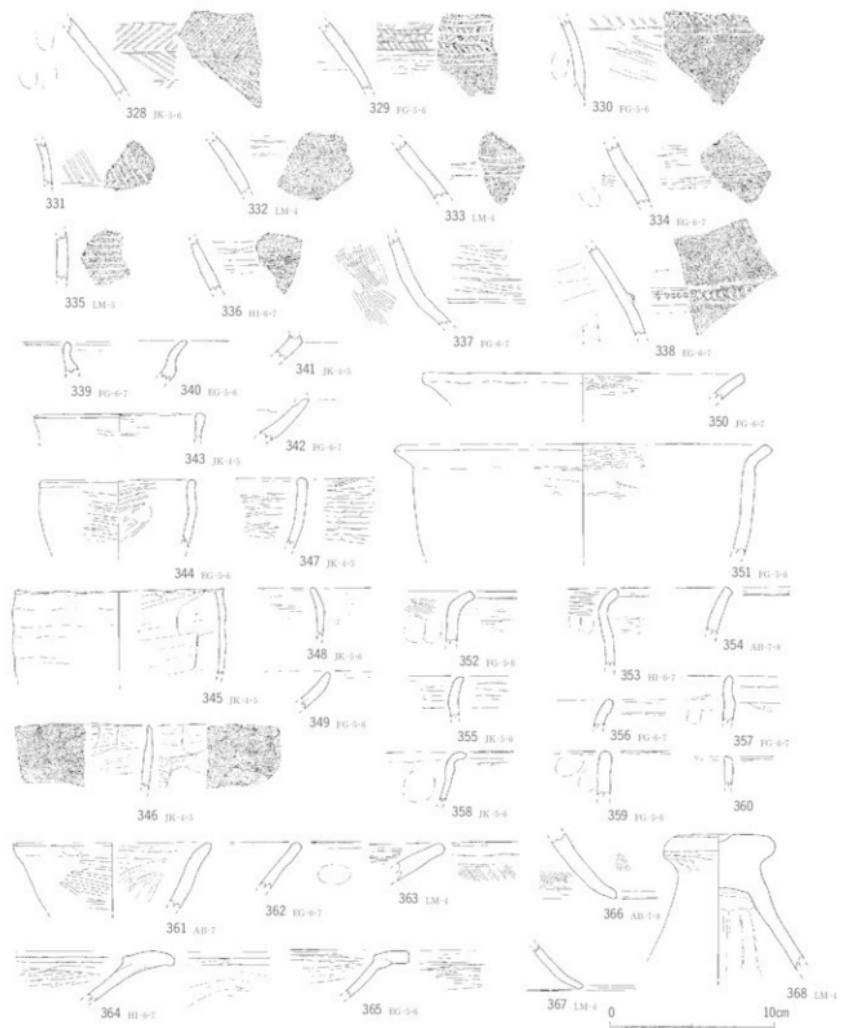


Fig. 20 10層出土土器実測図 5 (1/3)

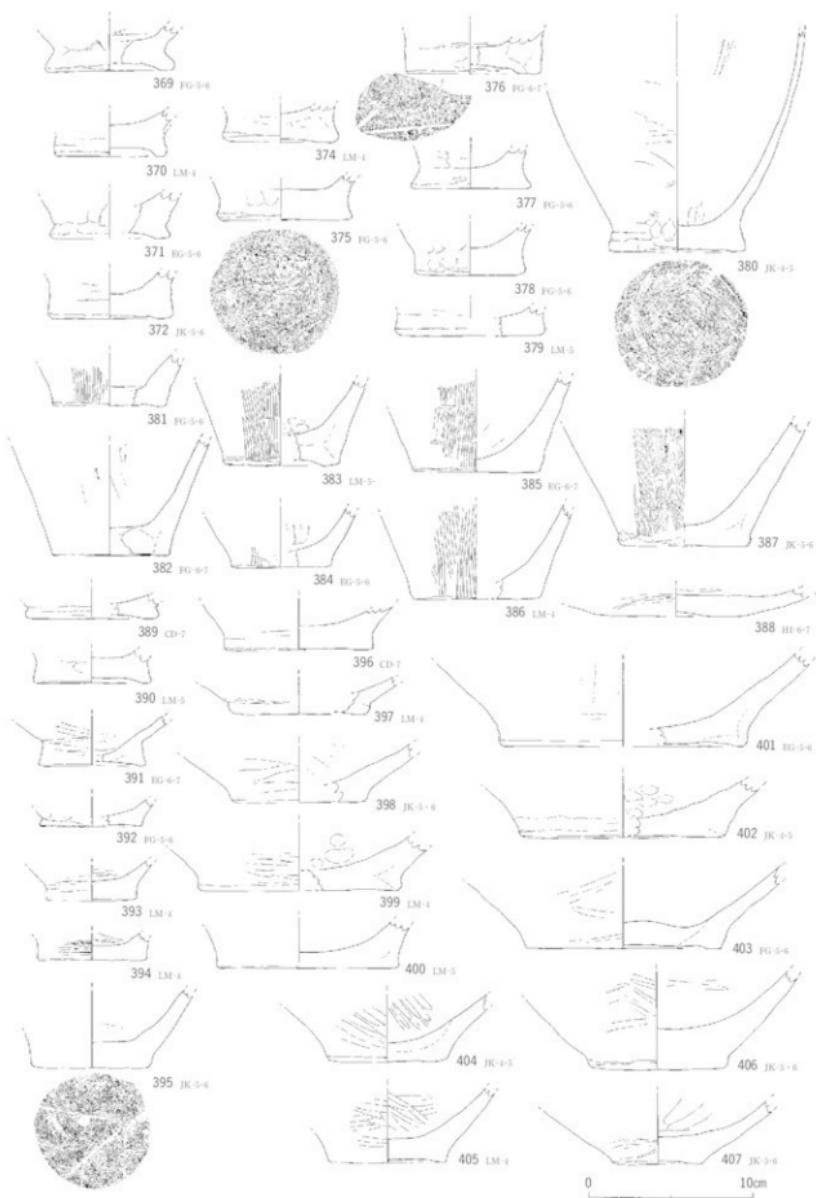


Fig. 21 10層出土土器実測図 6 (1/3)

高坏の坏部で、364は内外に擦痕、365は内面研磨、外面は器面が荒れる。366、367は高坏の脚と考えられる。366は内面の刷毛目が顯著で外面は刷毛目とナデ。367は器面が荒れ気味でナデ調整か。368は蓋で内面は煤ける。

369から387は甕の底部である。369から380は台形から円盤状の形を成す。内外面ともナデ調整である。369から376、380は底外面が上がり、多くは削りを施す。376は削りの後にヘラナデ調整を施し、木葉痕が付く。369は焼成後の穿孔を行い、内面に炭化物が付着する。377から379は底はナデ調整で、377、378の内面には炭化物が付着する。380はナデ調整で内外とも擦痕が残る。381から387は直線的に立ち上がる。382はナデ調整で他は縦方向の刷毛目を施す。382、385から387の内面には炭化物が付着する。382は焼成後の穿孔が施される。388から407は壺の底部で鉢も含む。388は立ち上がりのない平底で、外面はわずかに上がる。内外面に研磨調整を施し外面灰褐色、内面暗褐色を呈す。389から394、396、397は台形、円盤状の底部である。389から392は削りによりわずかに上げ底である。391は外面を丁寧な研磨調整を施し細かな胎土で、他は内外面ナデで胎土に砂粒を多く含む。393は外面に橙色の化粧土をかけている。胎土は砂粒を多く含む。394外面は研磨調整が顯著で、底も削りの後、研磨する。胎土は砂粒を含むが細かく外面には光沢がある。395は底に木葉文が見られる。胎土は粗めで内面に炭化物が付着する。甕か。396から407はナデ調整または研磨調整を施す。403、407は若干の上げ底だが、削り調整は見られない。405は内面に炭化物が付着する。

11層出土土器 (Fig. 22~25)

408から449は刻目突帯文系の甕である。408は口唇部に被るように突帯を貼付し幅のある工具を密に押圧して刻目を入れる。外面は削りの後ナデで細かな凹凸が著しく暗褐色を呈し、内面はナデである。409から415は口唇部から下がった位置に突帯を巡らす。刻目は棒状の工具で縦方向に刻み、器面をナデ調整、煤けて褐色系の暗いものが多い。412は口唇部を細く成形し小ぶりで浅い刻目を施す。横方向の擦痕が見られ、端茶色でやや明るい。414は先が削れた工具での押圧である。416から426は口唇部に接する位置に突帯を巡らす。刻目は小ぶりで縦方向、押圧に寄るものが多い。420はヘラ状工具により横方向に刻み、421は二枚貝と考えられる先が曲がった工具で施す。調整はナデが多く、417内面に、422が外面に二枚貝条痕が見られる。416、423の外面には炭化物が付着する。427から434は口唇部に被るような高めの突帯を巡らし、上端が口唇部と一体となる。外面は横などで煤けるものが多い。435から438は高い断面三角突帯を巡らし強くなで、小さな刻目を施す。438外面は縦方向の擦過、他は横方向のなでである。438には炭化物が付着する。439は無刻目の突帯を巡らす。橙茶色を呈す。440は薄い器壁に低い突帯を巡らせ、刻目は浅いものを施すようだが不明瞭である。暗褐色を呈す。441から449が口縁下の突帯を持つ。441、442、445は屈曲部に巡る。煤けるものが多い。刻目は縦方向の刻み、押圧により施す。449の刻目はごく小さい。

450から476が外反口縁の甕で469までは口唇部に刻目を施す。450は短く外反する口縁下に木口痕が見られるが、器面はナデ調整で仕上げる。胴部は張らずに底部へすばまる。以下、外面調整は縦方向の刷毛目でナデにより消えるものもある。口縁部には横ナデを施す。450、451、464、465などは明瞭に刷毛目が残る。464は刷毛目の後に横ナデを行っていない。また煤けるものが多く、460、461、464、466には炭化物が付着する。刻目を施さない。454は口縁下に刻目突帯を巡らせ、突帯貼付の前後に縦方向の刷毛目を施す。外面に炭化物が付着している。471から476も縦方向の刷毛目調整で、473以外はその後口縁部に横ナデを施す。

477から520は壺である。横方向の研磨またはナデ調整を施す。477は夜臼系と思われる小片からの復元で器面は荒れる。479、480が口縁外面を肥厚し段を有す。480は内外面に強い横ナデを施す。481は

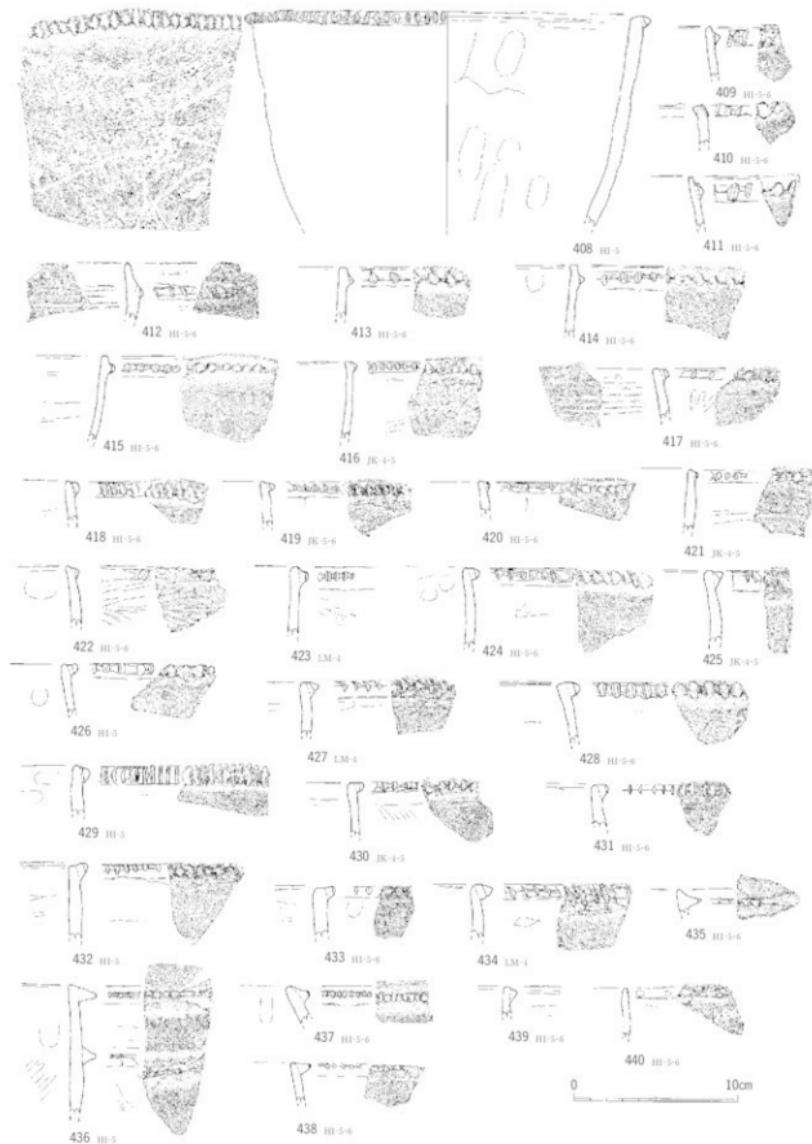


Fig. 22 11层出土土器实测图 1 (1/3)

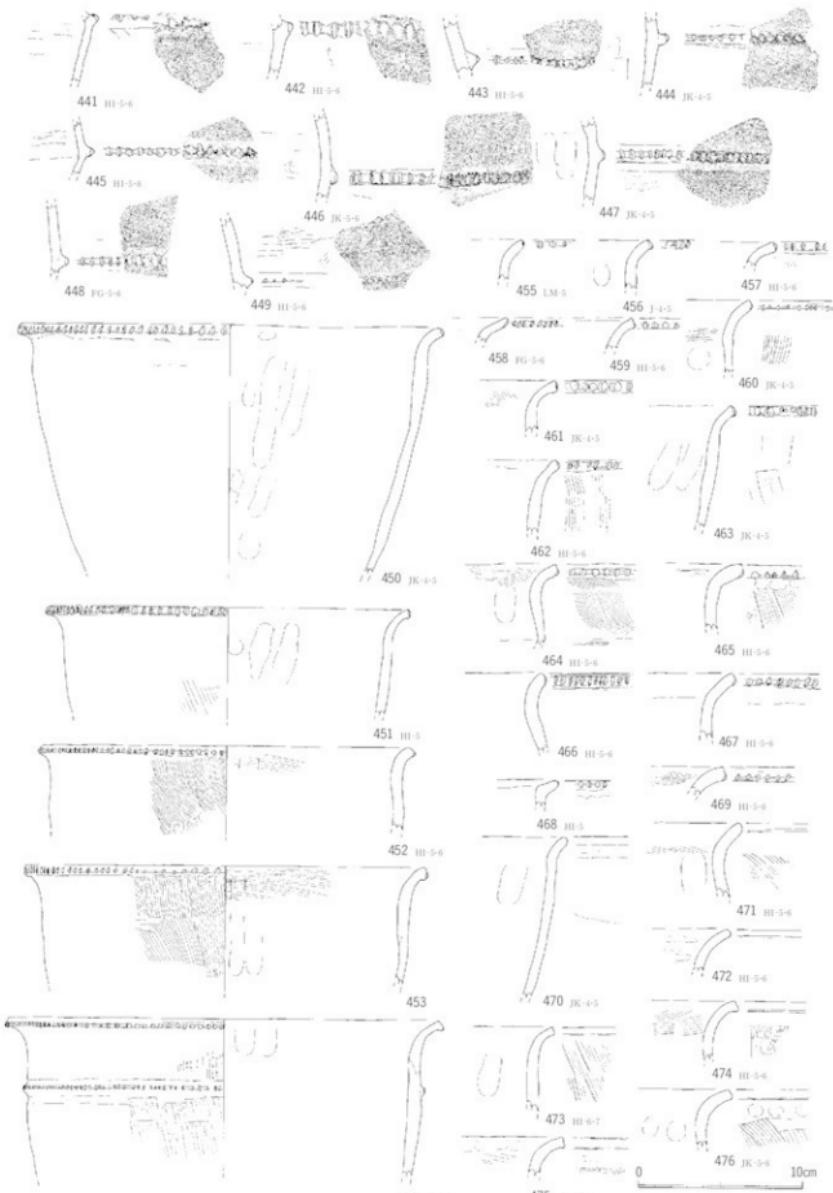


Fig. 23 11層出土土器実測図 2 (1/3)

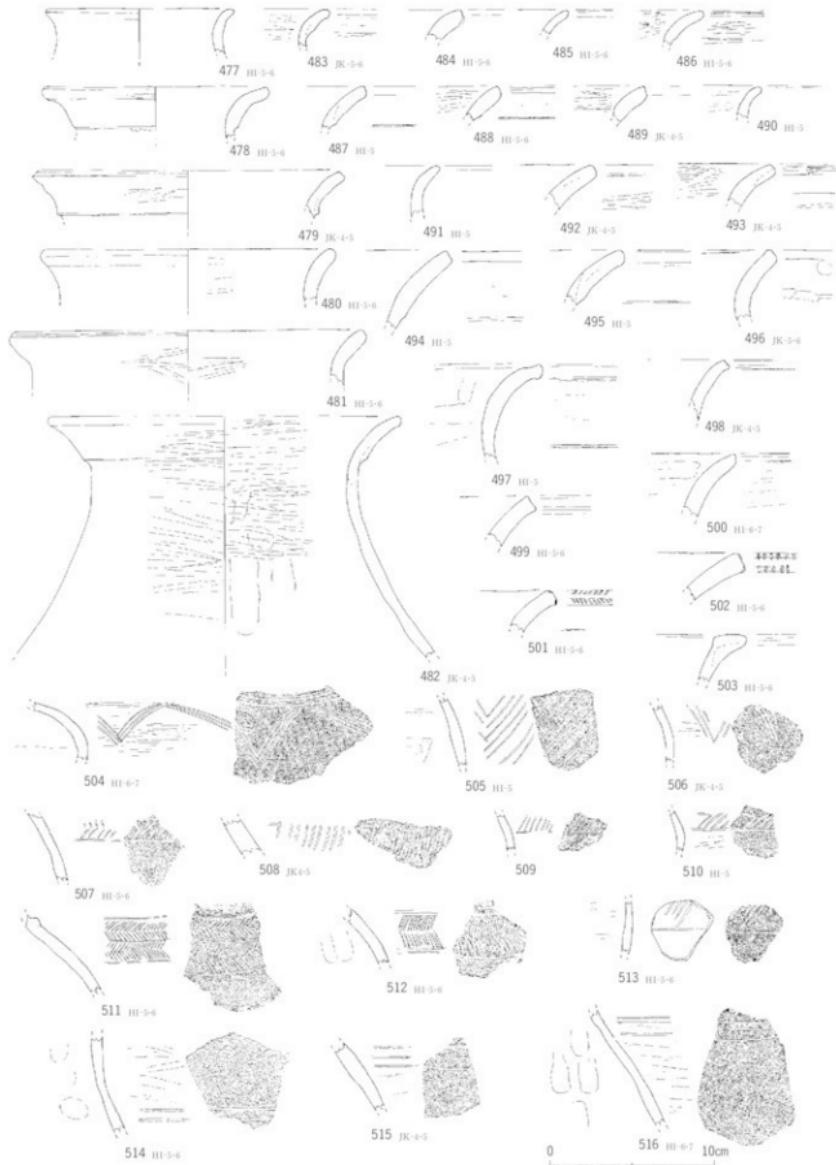


Fig. 24 11層出土土器実測図 3 (1/3)

研磨調整で内外面に赤色顔料を施す。以上、小片からの復元である。482は口縁外面を肥厚し段を有す。内外面を研磨調整し赤色顔料を施す。1/2弱が残存する。483から496のうち485、490から493以外は口縁下に大小の段を有す。487は内外に赤色顔料を施していた可能性がある。493外面は薄い橙色を呈すが化粧土か。497は頸部に浅い沈線が巡る。同一個体と考えられる胴部破片が出土しているが、口縁部とは接合しない。501、502は口唇部の上下端部に細い刻目を密に施す。503は中期の鋤先口縁である。504から516は胴部に施文を持つ。512が二枚貝による以外はヘラ描き沈線であろう。504は頸部との境に二条の横線を引き、その後山形複線文を左から右へ描く。外面は研磨調整で暗褐色を呈す。505、506も複線山形文になると考えられる。507、510から512は無軸羽状文を描く。510は外面研磨で胎土が細かい。511は頸部との境に低い三角突帯を巡らせ、その後横線、羽状文を施す。羽状文は密に雑な構図で描く。512は沈線の後、密に羽状文を施すがこれも雑である。508は斜線が描かれ、横線ははっきりしない。羽状文の可能性がある。509は細い横線の後に斜線を描き、羽状文の下半分と考えられる。513は横線と4本の平行斜線とこれと方向を異にする斜線が1本見られるが文様は不明。514から516は頸部との境の横線文である。517から520は頸部と胴部の接合部である。571は器面は荒れるが、丁寧な成形で胎土は細かい。外面には段状の沈線、内面は接合部の段がある。518の内面の接合部の段が明瞭に残るが、外面にはない。519は外面頸部、内面胴部に横方向の刷毛目が明瞭に残る。520は外面に横方の研磨調整を施し橙色を呈す。

521から532は鉢形の土器である。521は外反する口縁で口縁端部が厚い。522は浅鉢だが雑なナデ調整で成形も粗い。523は浅鉢状の器形だが深めになろう。頸部は横なので、外面体部は剥がれ、内面には炭化物が付着する。524は緩やかな屈曲部を経て立ち上がる。口縁部を欠く。525から527は外反する口縁部で壺の可能性もある。528は器壁が薄く、口縁部が短く外反する。器面は粗いヘラナデである。529は内湾汽味に直口する口縁部で内外面に研磨調整を施し、内面黒褐色、外面淡茶色を呈す。530は直線的で傾きが強い器形で口縁内側に小さな段、粘土帶接合痕がみられる。器面調整は内面研磨、外面擦過である。531は口縁部に小さなT字状の突起を持つ。外面ナデ、内面には縱方向の擦過が見られる。532は口縁部が短く屈曲し端部に刻目を施す。内外面がナデ調整で外面は煤ける。533は外面に緩やかな段を持つ。壺の可能性もある。524は高环の口縁部であろう。器面は荒れる。535は蓋で上面に中央を縱断する線がある。

536から555は甕の底部である。536から546は台形底を呈す。底は若干の上げ底で542、543はナデているが、他は削り痕が残る。調整はナデを施す。542内面には炭化物が付着する。547から554は直線的に広がる。548がナデ仕上げの他は縱方向の刷毛目が残る。547は若干の上げ底を削っている。550、551、553、554は内面に炭化物が付着する。555は高い上げ底で端部が張る。外面は刷毛目が明瞭に見られる。556から564は壺の底部で鉢のものもある。556は底をヘラナデ調整で内外黒褐色を呈す。557は底が削り調整で若干の上げ底となり、内外面が淡橙色を呈す。558は2次焼成によるものか一部桃色を呈し、底に木葉文が見られる。558はいわゆる円盤張り付け様を呈し、底を研磨で仕上げる。胎土は細かく精良である。560は器壁が薄く、浅く広がるようで浅鉢か。561から563はナデ調整、564は外面研磨で暗褐色を呈し、内面はナデ調整である。

その他の土器 (Fig. 26, 27)

ここでは層位が不明のものを取り上げる。565から576は突帯文系の甕である。565、568、569、572が口唇部からわずかだが下に突帯を巡らす。565は条痕状の粗い擦痕を横方向に施す。572は外面は斜方向の削り状、内面は横方向の二枚貝条痕である。567、570は高い突帯を口唇部と一緒にナデ、小ぶりの刻目を施す。571は口唇部が厚く、胴部が内側に傾斜し器形不明。573は低い突帯に大きめの刻目

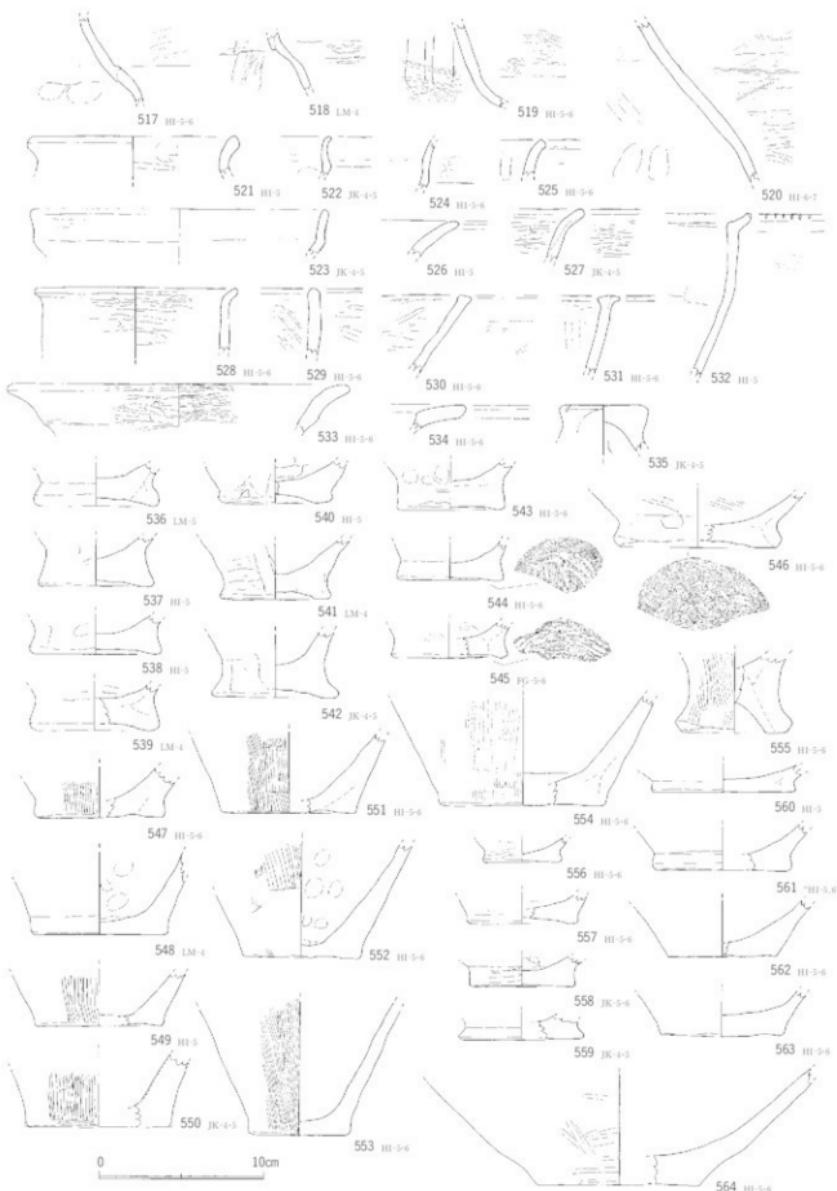


Fig. 25 11層出土土器実測図 4 (1/3)

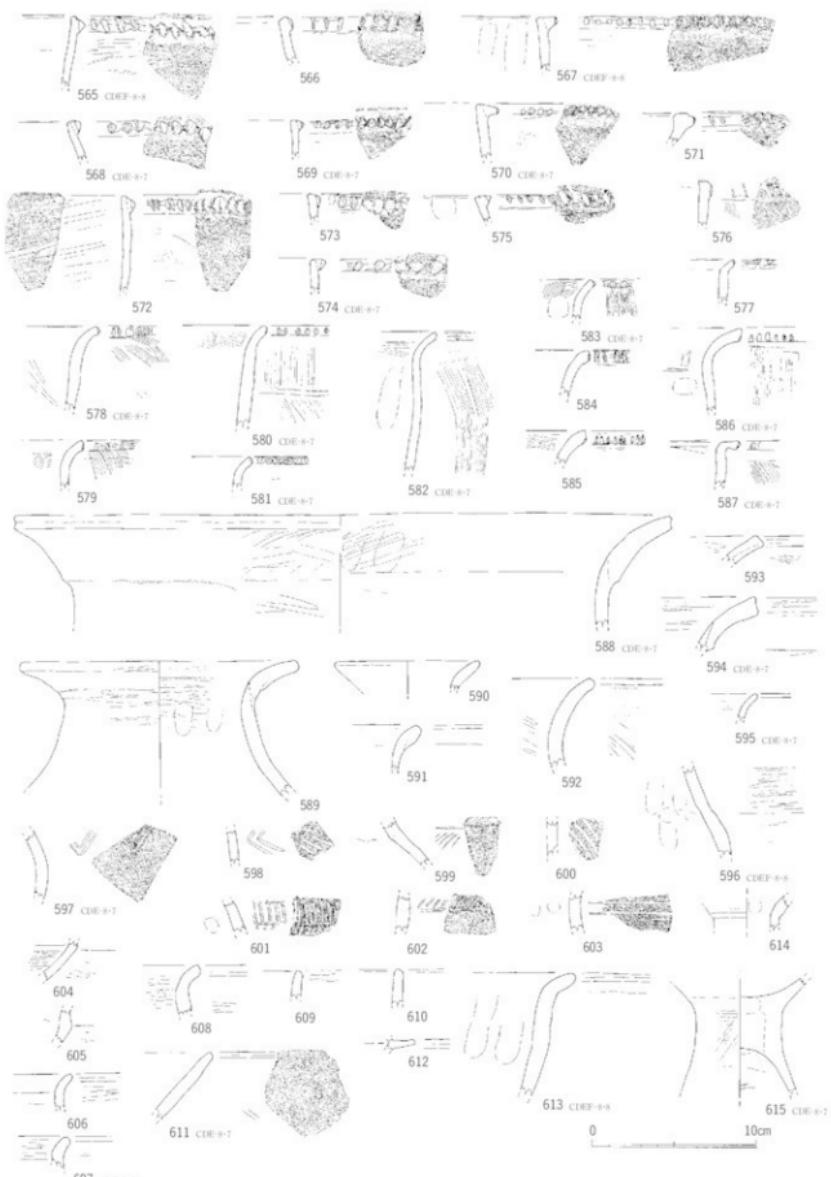


Fig. 26 その他の土器実測図 1 (1/3)

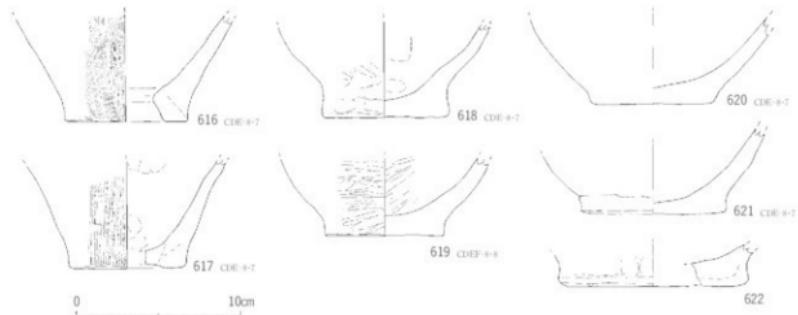


Fig. 27 その他の土器実測図2 (1/3)

を上から下に刻む。576は口縁下突帯で刷毛目調整が見られる。

577から587は外反する口縁部に刻目を施す。外面はほとんどが縱方向の刷毛目の後に口縁部を横ナデを施す。578、583は横なでが見られない。色調は579が薄く明るい橙色を呈す他は灰褐色から褐色を呈し煤けるものが多い。580は口縁下に浅い横線を引き、ここから刷毛目の方向が変わる。

588から603は壺である。588は内外研磨調整で、外面は化粧土によるものか橙色を呈す。589は外面をナデ、内面は粗い研磨調整を施す。590は小片からの復元で器面は荒れる。591は口唇部を厚く肥厚し横ナデ調整を施し、淡橙色を呈す。592から594は横なで調整で594外面には段が見られる。595は薄い器壁で外反する。器面が荒れ詳細不明。597から603は599以外は沈線で文様を描く。597は複線山形文、598は無軸羽状文を描く。599は頸部と胴部の境に細い横線を引きその下に二枚貝の押圧により弧状の線を描く。600は3本の弧状に併行する線が山形文になると思われる。601は細い横線の間に方向を逆えて太めの斜線を描く。羽状文の一種であろう。602は横線の上に弧状の平行線を描く。羽状文と考えられる。603は胴部と頸部の境に2本の平行線を描く。

604は内外面を横方向の研磨で浅鉢の様相である。口唇部は面取でそのまま胴部となる可能性もある。605、606は浅鉢状の形態を持つと思われる。607は内面に段状のくぼみがあり鉢としたが、壺の可能性もある。608は口縁部が外反し内外面横方の研磨調整である。609は直口する口縁部の外面をわずかに肥厚する。611は直線的に延びる口縁で傾きが強い。612は鉗状の張り出し部で器形不明。砂粒が多く含み、器面は荒れ気味である。613は外反口縁で外面ナデ調整で炭化物が付着する。614は小片からの復元で器形不明。壺の屈曲部であろうか。615は高坏で器面は荒れ気味だが丁寧なナデ調整を施しているようだ。

616、617は外面に刷毛目を明瞭に残す底の底部で、616は焼成後に穿孔する。618から622は壺である。619は外面に横方向の研磨調整を施し、胎土は砂粒が少なく細かい。他はナデ調整で胎土に多くの砂粒を含む。

(2) 土製品 (Fig. 28)

623は紡錘車で焼成前の穿孔があり、ナデ調整で仕上げる。624は壺の破片を転用した紡錘車と考えられる。中央に焼成後に表裏面から穿孔する。内外面に擦痕が見られる。625から634は土器片を転用した土製円盤を考えた。打ち欠きの痕跡ははっきりしないが、器形から確からしいものを取り上げた。この他にも疑わしいものはある。出土位置等は表4に示した。

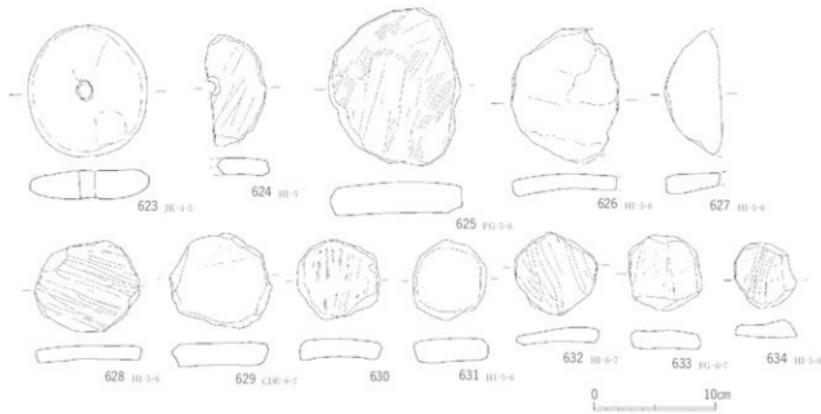


Fig. 28 土製品実測図 (1/2)

(3) 石器 (Fig. 29~34)

各層から石器が出土したが、出土数が少ないため一括して示す。礫石器は図示した以外に石斧が割れた剝片等がある。石器と認識できるものはほぼ掲載している。剝片石器のほとんどが黒曜石で、剝片、核の量に対して製品は少ない。出土グリッド、計測値は表に示した。

石斧等 635から637は玄武岩製で敲打痕が見られる。いずれも刃部側を欠く。635はやや扁平で器面摩耗のためはっきりしないが自然面を残し若干の成形を施す。637には正面に斜方向の研磨痕が見られる。638は器面を丁寧に研磨し、側面に敲打痕が見られる。薄手で小型の石斧を敲打具として転用したものか。639は頁岩製で石斧様の形態で側面に敲打痕が顕著である。640から642は玄武岩製の石斧未製品または失敗品と考えられ、いずれも自然面を残す。641は一部摩滅した部分があり、敲打具として使用された可能性がある。

叩き石 643から646は玄武岩、頁岩の柔らかい材質の礫を持ちやすい形に成形する。一部に敲打による摩耗が見られる。647から652は5 cm大の球形の礫に成形を加えず敲打具として使用し、一部または端部全面に摩耗が見られる。653は小型の礫を一部打ち欠き、端部の広い範囲に摩滅痕がみられる。654、655、656は棒状の自然礫の特に両端部を敲打具として使用している。一部、指にかかる箇所を削めて持ちやすく整形している。657、658は花崗岩の円礫で一部に敲打痕が見られる。他に加工はない。659は安山岩の剝片で片面の全体に敲打痕が著しい。

砥石 660、661は砂岩系で順に1面、2面を使用した痕跡がある。662は粗い砂岩製で6角柱状に成形する。図の上面は破面である。器面荒れのためか敲打、研ぎ等の使用痕は見られない。663から665は同一材質の礫破片で結晶が大きもあり。表面は平滑で破面を一部使用しているようにも思われるが、自然礫の破片かもしれない。

石錘 666から670は自然礫の四方の一部を打ち欠き、敲打によりくぼみを成形している。

柱状片刃石斧 671は白色の器面が美しい。全体に摩滅しており調整等は見られない。

石包丁 672、673は刃部の磨き、穿孔があり破損品と考えられる。674は刃部に磨きは見られず、穿孔は途中である。675は刃部側を欠き、成形も途中と考えられる。穿孔は両面に窪みが見られるが貫通

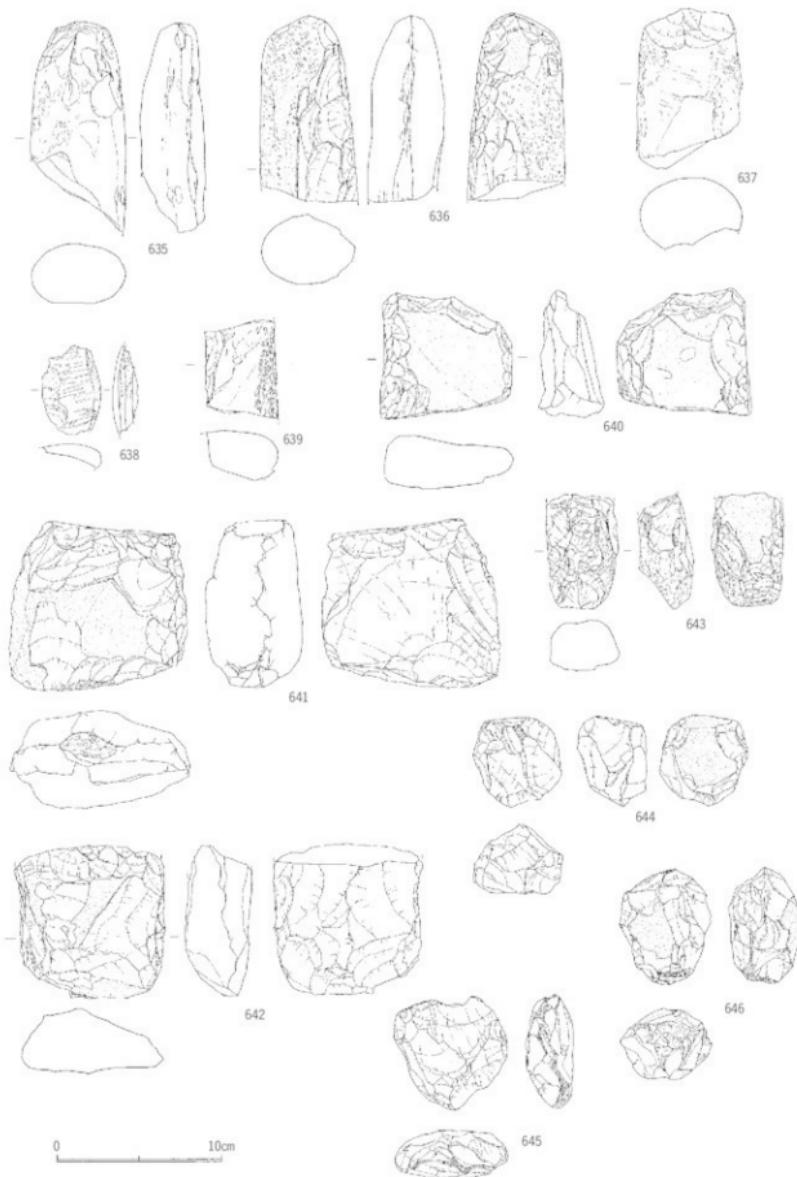


Fig. 29 碰石器实测图 1 (1/3)

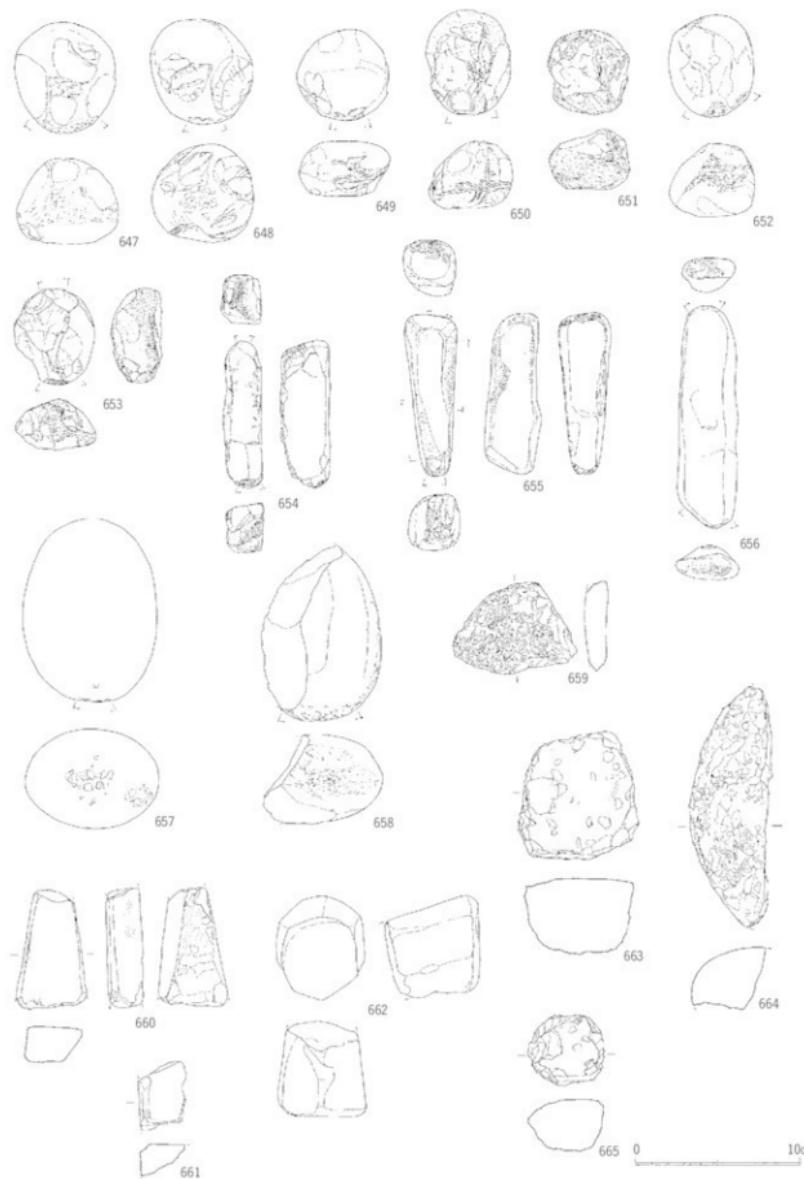


Fig. 30 碰石器实测图 2 (1/3)

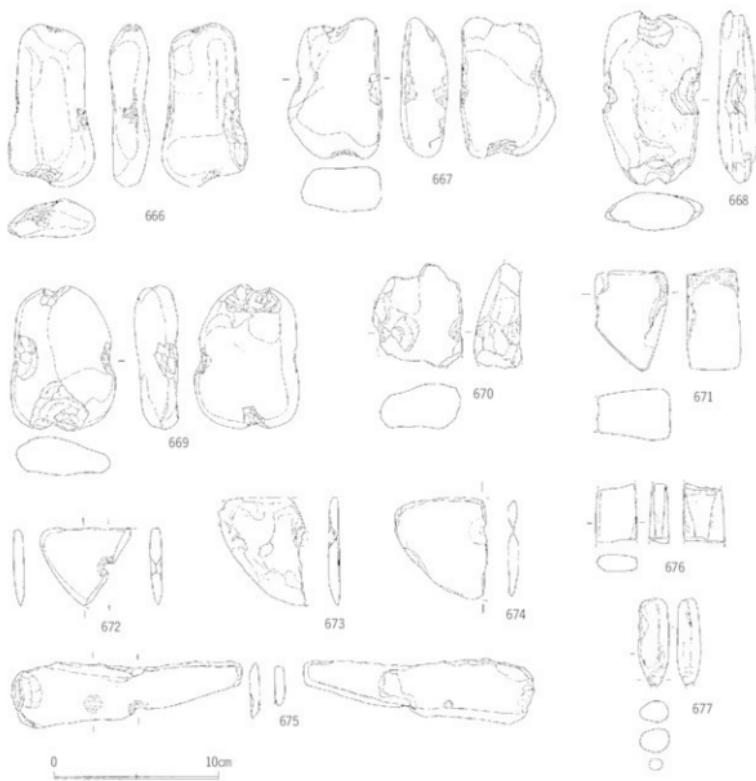


Fig. 31 碓石器実測図 3 (1/3)

していない。

棒状石製品 676は扁平の棒状を呈し両端を欠く。全面を研磨し、一側面は平坦に、他は丸みを帯びる。

穿孔具 677はいわゆる石包丁の穿孔具とされているもので、細長い礫の側面を研磨、敲打で成形し、指係りを整える。先端は欠くが錐状に細くなり、この部分は横方向の摩滅が見られる。石包丁の穿孔後、孔側面の研磨に使用されたと考えられる。

石鎌 678は安山岩製で両面を細かな剥離で成形する。679は片面に主剥離面を残す。680は一側面のみが残存する。両面を粗い大きめの剥離で成形し薄手である。681は自然面を多く残し基部のみに細かな剥離を施し、先端は当初の剥片の形のままである。682は厚手の剥片の主剥離面の一側面に細かな剥離を施し、反対の側面に剥離で抉り状に成形する。擦器または鎌の未製品と思われる。

石錐 683は錐部を縦長の剥片の側辺側に細かな剥離のみで成形する。背部にわずかに剥離成形が見



Fig. 32 剥片石器实测图 1 (3/4)

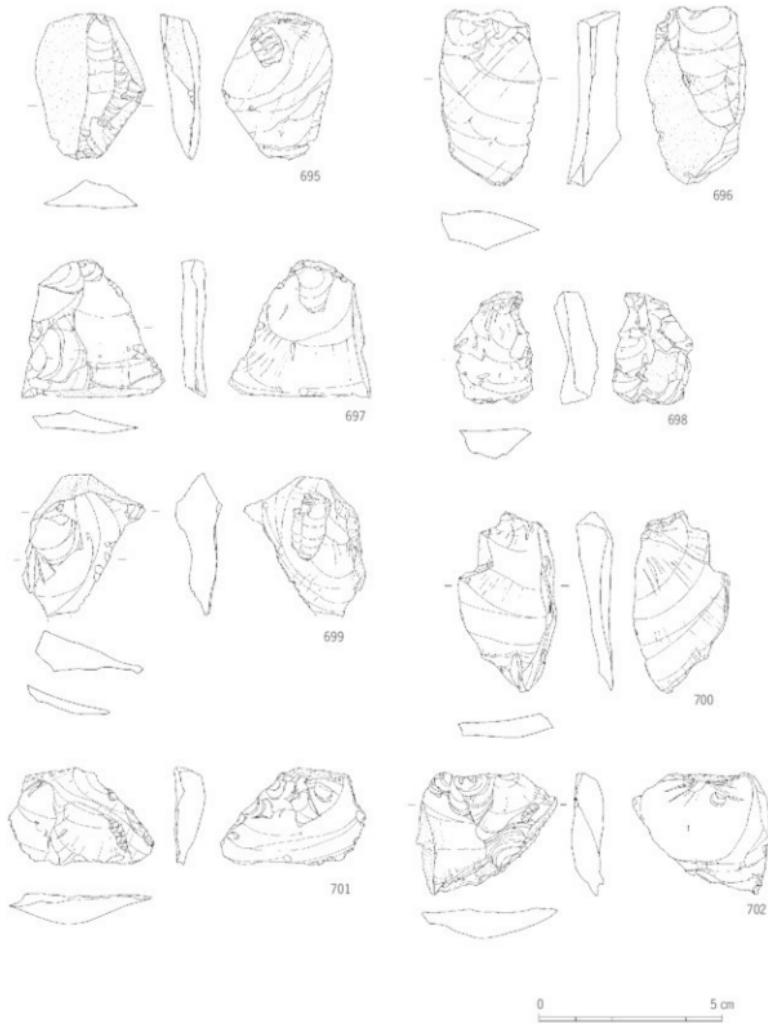


Fig. 33 剥片石器実測図 2 (3/4)

られる。先端を欠く。684は縦長の剥片の両側片を画面から顕著な剥離で形成する。先端は欠ける。

擦器 685は先端に自然面を残す横長剥片の側辺側に刃部とる。686は縦長剥片の基部と片側辺の形面のみに剥離調整を行う。

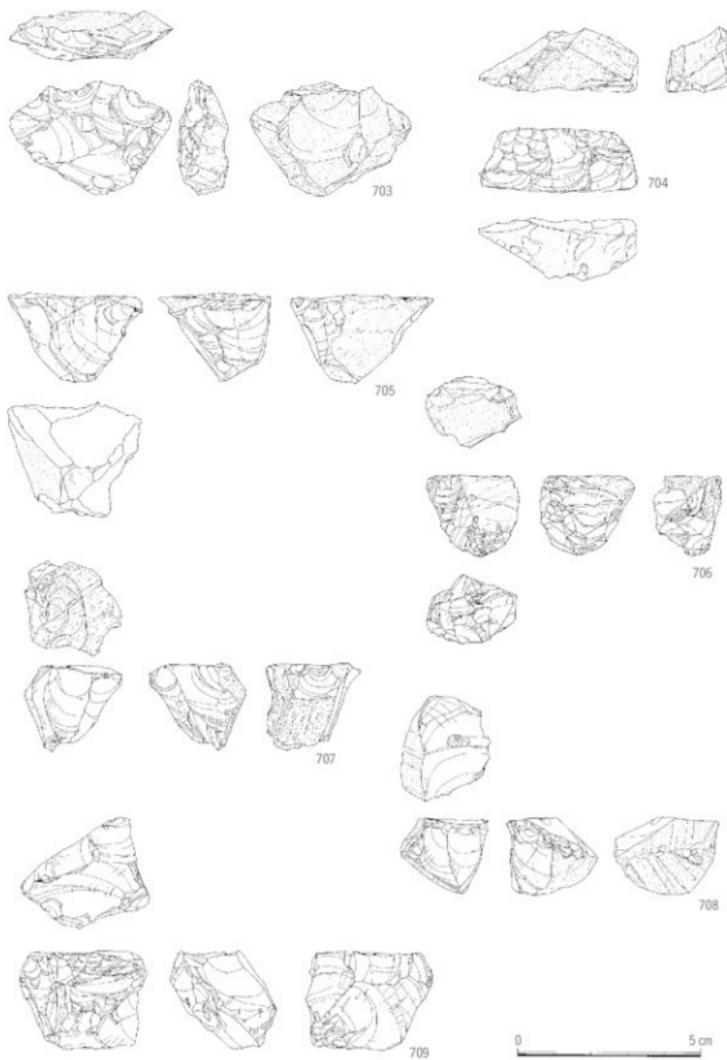


Fig. 34 剥片石器实测图 3 (3/4)

表4.

	出土グリッド	層	大きさ(mm)	重さ(g)	材質		出土グリッド	層	大きさ(mm)	重さ(g)	材質	
823	鉛錐牽	JK 4-5	10	52×48×11	40.34	土製	666	石頭	JK 5-6	10	98×52×23	184.24
824	鉛錐牽	HI 5	11	46×23×7	9.63	土	667	石頭	JK 4-5	11	85×57×28	233.37
825	円錐状土製品	PG 5-6	7	62×54×12	60.2	土質	668	石頭	JK 4-5	5	106×60×24	265.7
826	円錐状土製品	HI 5-6	11	56×43×7	21.89	土	669	石頭	HI 6-7	10	88×69×21	211.46
827	円錐状土製品	HI 5-6	11	51×23×8	9.44	土	670	石頭	LM 5	10	63×54×27	111.75
828	円錐状土製品	HI 5-6	11	36×43×6	12.11	土	671	粘土片刃石原	JK 4-5	7	60×44×31	166.9
829	円錐状土製品	CDE 8-7	38×42×9	19.53	土?	672	石頭	CDE 7-8	55×42×7	20.91	真77	
830	円錐状土製品		32×34×9	11.3	土	673	石頭	FG 5-6	7	52×66×7	28.56	
831	円錐状土製品	HI 5-6	11	32×34×7	11.24	土?	674	石頭	JK 4-5	11	55×62×6	37.98
832	円錐状土製品		10	34×34×6	7.95	土	675	石頭	LM 4	11	141×40×6	49.82
833	円錐状土製品	FG 6-7	10	31×29×7	9.23	土?	676	石頭	JK 5-6	10	35×25×5	18.28
834	円錐状土製品	HI 5-6	11	27×25×7	5.34	土頭部	677	穿孔具	FG 5-6		53×18×14	22.6
835	石斧	JK 4-5	7	127×57×39	404.47	玄武岩	678	石頭	HI 5-6	11	23×14×4.0	1.06
836	石斧	HI 6-7	10	113×59×42	491.16	玄武岩	679	石頭	HI 5-6	11	16×17×3.0	0.76
837	石斧	JK 5-6	11	98×63×44	405.14	玄武岩	680	石頭	FG 5-6	10	20×18×3.5	1.24
838	石斧	FG 5-6	7	55×35×12	25.54	真77	681	石頭	FG 5-6	10	30×25×7.0	4.03
839	石斧	FG 5-6	10	61×42×31	139.64	真77	682	石頭	LM 4	11	32×26×9.6	7.33
840	石斧	JK 4-5	7	77×80×40	352.56	玄武岩	683	石器・擦器	HI 6-7	10	33×30×5.5	5.35
841	石斧	FG 5-6	10	102×108×58	1004.67	玄武岩	684	石頭	HI 5-6	11	29×17×7.0	2.29
842	石斧	HI 5-6	11	92×91×31	479.13	玄武岩	685	石器	HI 5-6	11	25×33×7.0	5.44
843	鍛打具	PG 5-6	7	70×43×33	143.90	玄武岩	686	石器	FG 6-7	7	19×16×6.0	1.7
844	鍛打具	HI 5-6	11	52×55×44	169.63	玄武岩	687	UF	CD 7	7	27×18×4.3	2.28
845	鍛打具	JK 4-5	11	69×68×29	179.36	玄武岩	688	UF	FG 5-6	10	34×17×6.8	3.89
846	鍛打具	HH 5-6	13	70×55×43	202.67	玄武岩	689	UF	HI 5-6	11	37×17×4.5	4.46
847	鍛打具	EG 5	6	67×61×31	312.91	玄武岩	690	UF	JK 5-6	10	45×22×7.3	6.57
848	鍛打具	JK 4-5	7	60×64×60	345.25	玄武岩	691	UF	CDE 8-7	41×24×9.8	6.14	
849	鍛打具	HI 6-7	4	55×56×34	150.87	玄武岩	692	UF	JK 4-5	7	29×14×3.7	1.41
850	鍛打具	LM 5	10	64×52×41	187.41	UF	693	UF	JK 4-5	11	35×24×6.0	4.85
851	鍛打具	HI 5	11	51×49×36	129.54	UF	694	UF	AB 8		32×25×5.6	3.86
852	鍛打具	HI 6-7	4	62×51×44	239.7	UF	695	UF	JK 4-5	10	29×28×9.8	10.18
853	鍛打具	EG 5	7	59×49×31	115.22	UF	696	UF	FG 5-6	10	49×27×12.2	15.73
854	鍛打具	HI 6-7	11	89×29×23	111.19	真77	697	UF	JK 4-5	10	37×39×6.2	8.28
855	鍛打具	HI 6-7	10	98×34×32	139.18	玄武岩	698	UF	LM 4	10	30×21×9.3	5.74
856	鍛打具		135×36×21	175.33	東花崗岩	699	UF	CDE 8-7	40×24×9.4	7.32		
857	鍛打具	JK 4-5	7	112×82×61	832.47	花崗岩	700	UF	FG 5-6	10	49×26×7.8	8.06
858	鍛打具	HI 6-7	10	107×73×54	499.06	花崗岩	701	UF	JK 5-6	10	26×34×7.3	6.72
859	鍛打具	FG 5-6	10	75×55×14	70.09	安山岩	702	UF	HI 6-7	10	33×26×7.9	9.37
860	石核	FG 5-6	7	77×42×22	86.59	UF	703	石核	JK 5-6	10	30×38×12.2	15.25
861	石核	HI 6-7	11	41×29×20	24.91	UF	704	石核	JK 5-6	10	17×43×13.1	12.76
862	石核	HI 5-6	11	53×58×58	253.41	UF	705	石核	FG 5-6	10	22×36×25	18.68
863	石核	FG 6-7	7	77×73×45	454.87	粘土	706	石核	JK 5-6	10	23×14×16	8.97
864	石核	JK 4-5	11	146×43×28	318.1	粘土	707	石核	CDE 8-7	22×23×23	12.88	
865	石核	HI 5-6	11	47×41×32	88.84	粘土	708	石核	LM 4	10	19×29×24	13.38
						709	石核	JK 5-6	10	35×32×22	15.48	

使用痕のある剝片 剥片の側辺に見られる細かな剝離を使用痕とみなした。厳密な認定はできていない。687から699は縦長の剝片の側辺に使用痕が見られる。700から702は横長気味で端部または側辺に使用痕が見られる。剝片は縦長のものが多い。

石核 黒曜石製の石核40点が出土した。2、3 cm大の小型のものが多く、剝離された剝片の大きさも同様と伺われる。7点を図示した。703と704は一面のみに剝離が見られる。共に自然面を打面とする。703はあらゆる方向からの剝離を行っている。これに対し704は図の上面からの剝離である。705は図の上面に剝離が見られ、この剝離面から最後に3回の剝離を行う。705は3方向からの剝離が見られ、打面はいずれも自然面である。706は複数に打面転移を繰り返す。打点は自然面、剝離面を使用する。707は図の上面の自然面からの剝離痕が顕著に残るが、前段階に下側の自然面からの剝離も行っている。708は図の上面に剝離が見られ、この剝離面から4回の剝離を行い、底、背面には自然面を残す。709は様々な方向からの剝離が行われている。今回出土した石核の中では珍しく自然面を残さない。

(4) 木器 (Fig. 35、巻頭図版 2)

杭、板きれ、流木がしがらみ、杭列、包含層から出土した。杭は先を尖らせたものがほとんどで、中には先端を焼いているものが少量ながらあった。これらについて図化は行っていない。そのほかの

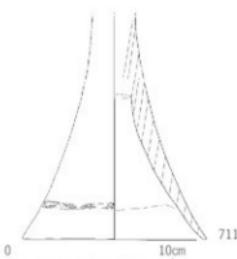


Fig. 35 木器実測図 (1/3)

製品は少ない。710（巻末写真5）はD7グリッドで（Fig. 7）10層からほぼ水平な状態で出土した。鋤状の形態を呈す。取り上げ後の保存処置が悪く、乾燥し原形を失ってしまった。不適切な取り扱いをお詫びしたい。取り上げ時の計測で長さ70cm、幅20cm、柄の部分で幅6cmほどを測る。厚さは1cm前後であった。711はK4グリッド11層から出土した漆器である。高环の脚部と考えられる。1/4弱の破片から底径11.4cmを復元した。外面と内面の裾から約2cmには黒漆を塗布する。外面の裾から2cmの部分には幅6、7cmの帯状にはんやり黄褐色を呈す部分が見られが、彩文か自然のものか不明である。

IV. 終わりに

3次調査区では2次調査区を流れる弥生時代前期から中期の河川SD01の西岸としがらみ、杭列を検出した。河川西岸となる10、11層は、弥生前期の遺物包含層で土器を主体とする遺物が出土した。

遺構、包含層の時期 西岸とした10、11層は突堤土器を含むが弥生前期の内におさまり、前期後半までの幅を持つ。中期の鋤先口縁と考えられる壺が1点出土している。10、11層は上下の関係にあるが土器の内容に大きな時期差はない。鋤先口縁については混じり込みの可能性を考えたい。7層は10層との間にしがらみが築かれ、10層を岸とする河川堆積であることから10層より新しいことは明らかだが前期の土器を主体とし、その時期は10、11層と大差ない。鋤先口縁、広口口縁壺134、135が出土しているが他の土器との連続性がなく、接する河川SD01に帰属する遺物の可能性がある。以上の時期認識が正しいとすると7から11層は弥生前期後半の短い時期に形成されたことになろう。ただし10、11層を含めて河川および湿地の堆積であり、遺物の混じりから時期差が分からなくなっている可能性がある。しがらみ材の放射性炭素年代測定で得られた値はBP2300年代で、補正年代で古くされている年代観では（その是非はともかくとして）弥生前期で上記の包含層形成時期と矛盾はしない。杭列は7、10層に打ち込んでいることから弥生前期以降であることは明らかであるが、詳細は分からぬ。SD01、02に沿った位置にあることから弥生中期までと考えられるがはっきりしない。

遺物の項では触れなかったが、弥生時代の遺物の他に、中世のものと考えられる土師皿の小片が2点出土している。この時期の遺構は調査区内、周辺では知見がなく、水田等の耕地に伴うものであろう。

石器組成 剥片石器の組成についてふれておく。出土した331点のうち安山岩は2点のみで他すべてが黒曜石である。その内訳は剥片、碎片が228点（68.9%）、使用剥片が52点（15.7%）、石核40点（12.1%）、石鎌5点（1.5%）、擦器4点（1.2%）、石錐1点（0.3%）、原石1点（0.3%）である。剥片、碎片と石核が多い割に製品が少なく、突堤文期以降の石器組成の傾向と同じである。原石は3cmの大の小品である。

遺跡の広がり 3次調査地点は河川の岸ではあるが湿地性の堆積である。しがらみ等の水利施設の存在からも水田の広がりが考えられる。2次調査地点東側は微高地となり集落等が広がる可能性がある。また、調査区南西のT6（Fig. 3）で弥生前期から中期の遺構が確認されており、ここにも集落等の存在が予想される。次年度以降に1、2、4次調査の報告を予定しており、その際に3次調査の成果の位置づけおよび福重稻木遺跡の性格について検討したい。



(1) ABCD グリッド（南から）



(2) しがらみ（東から）

(6) KLノリツ下東壁(南西かべ)



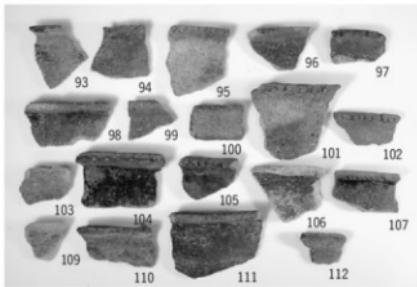
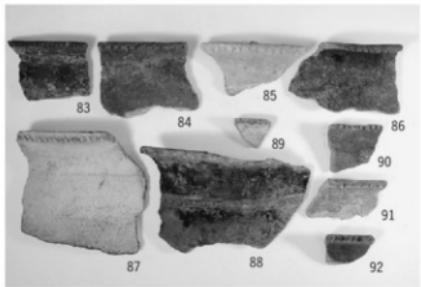
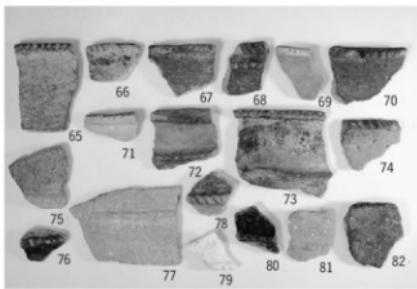
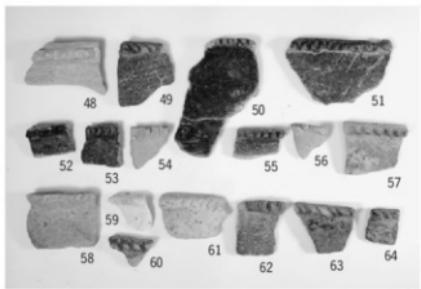
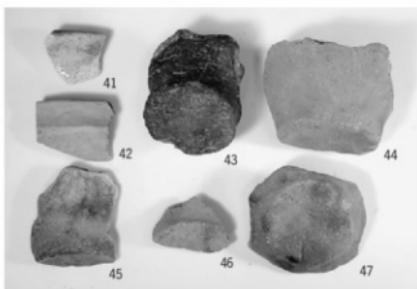
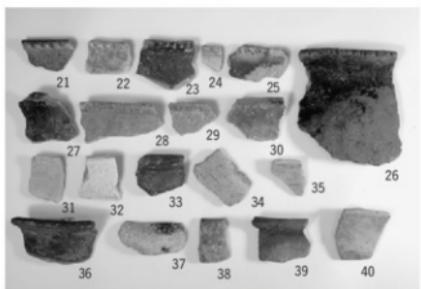
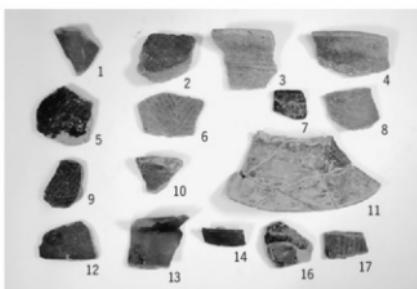
(5) 出土木器710

(4) EFノリツ下(西かべ)

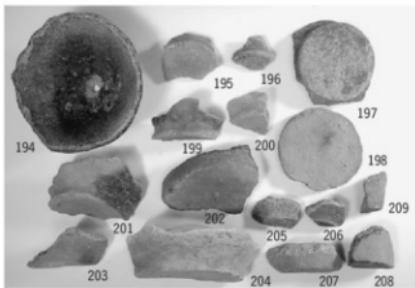
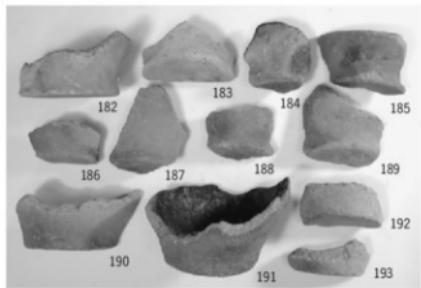
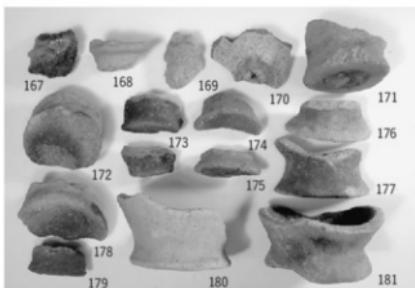
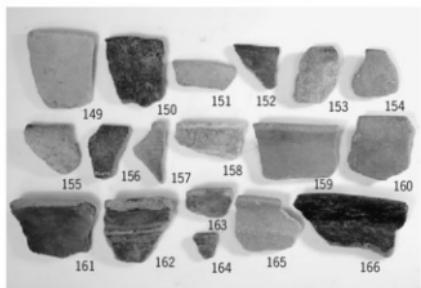
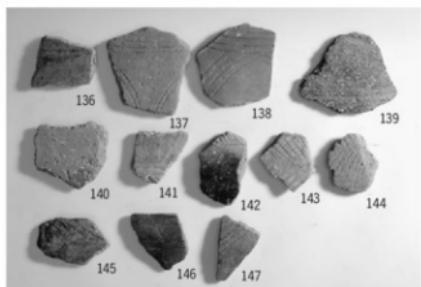
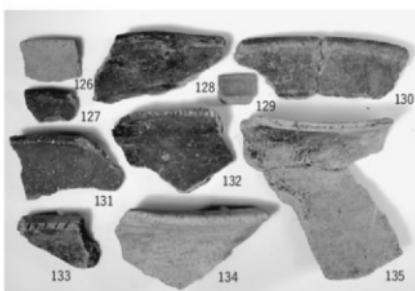
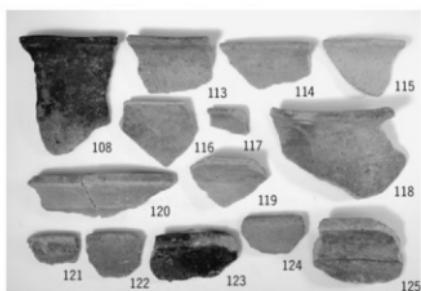


(3) CDノリツ下板列(北かべ)

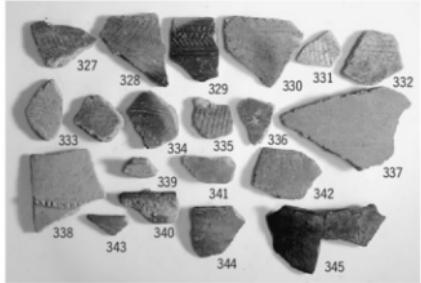
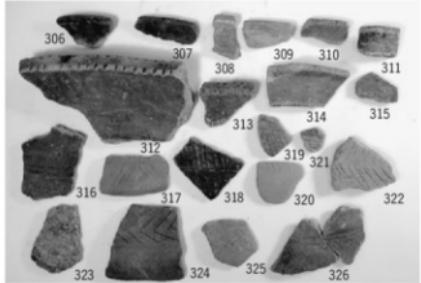
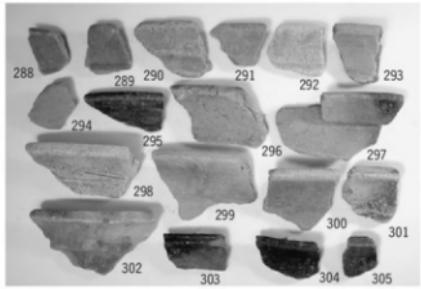
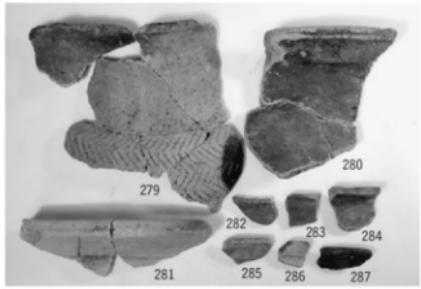
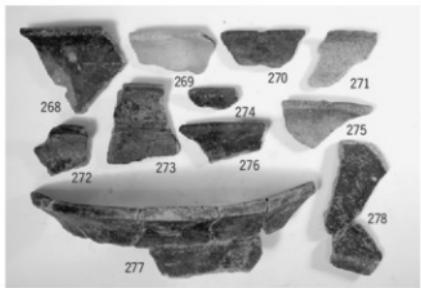
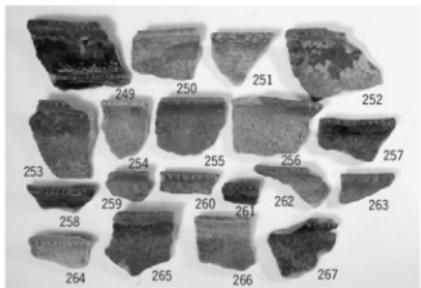
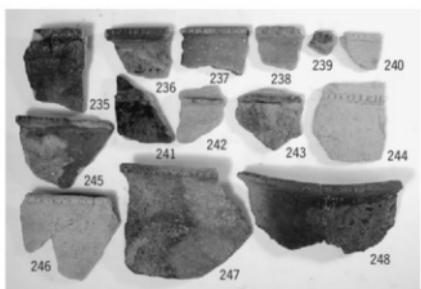
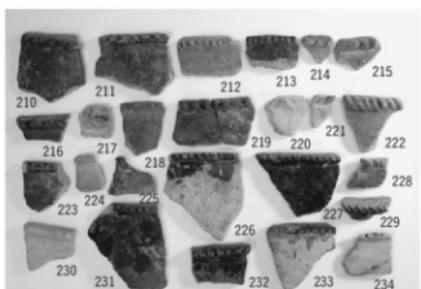




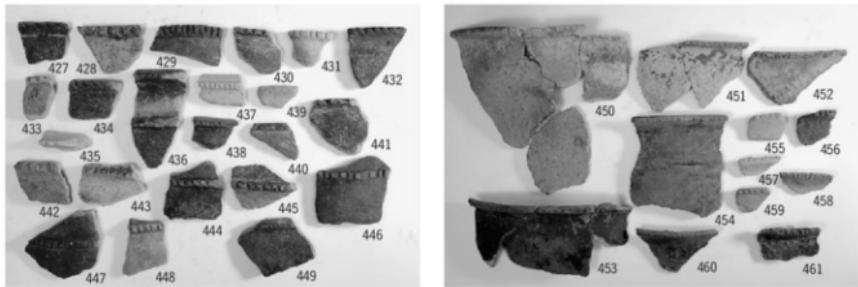
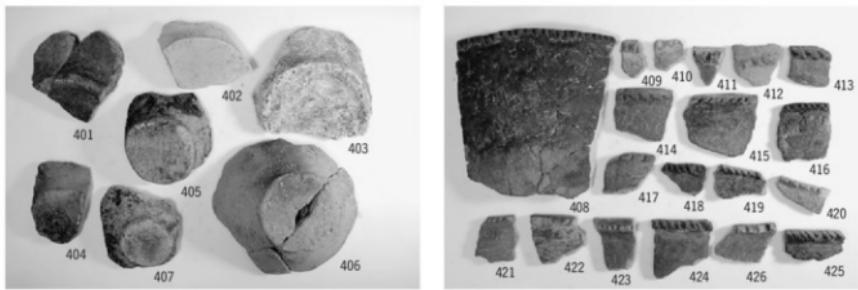
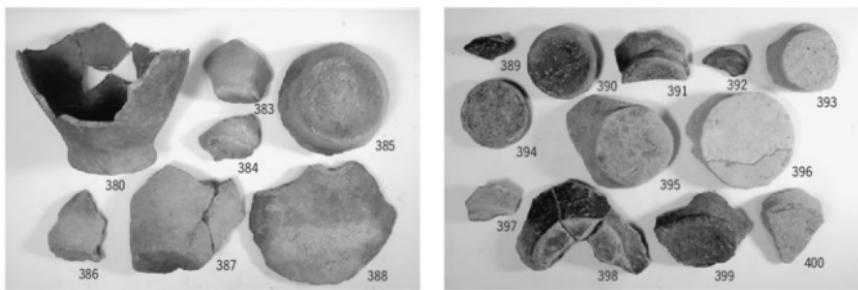
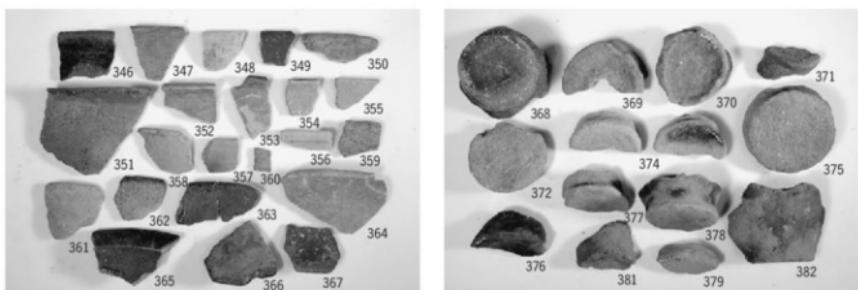
(7) 出土遺物 1



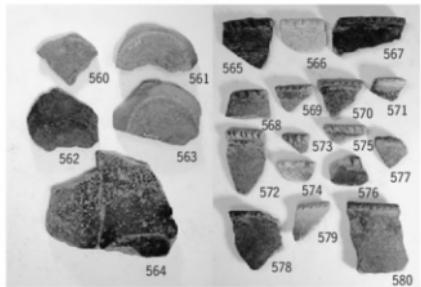
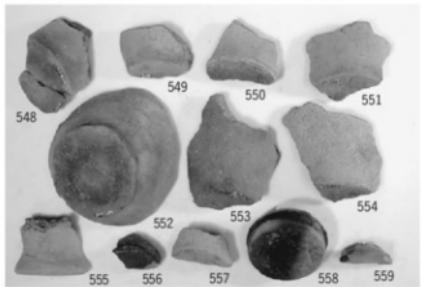
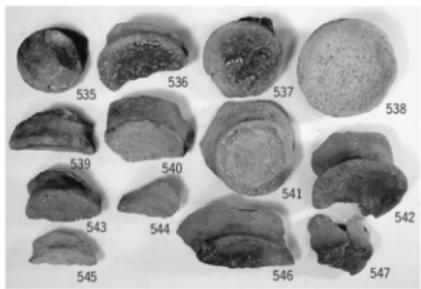
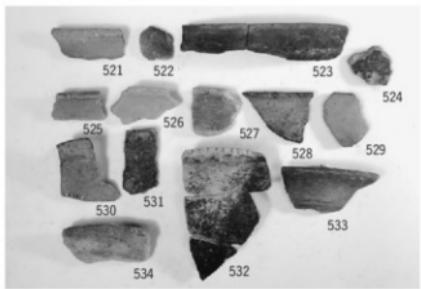
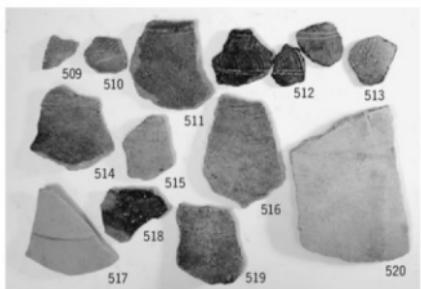
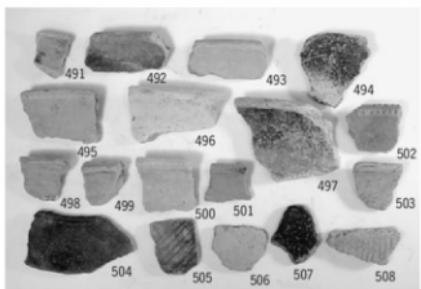
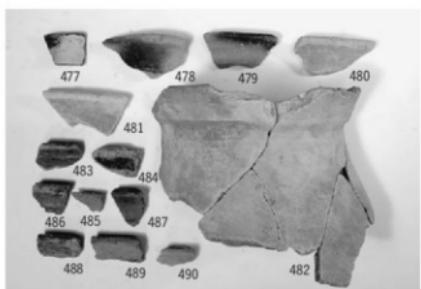
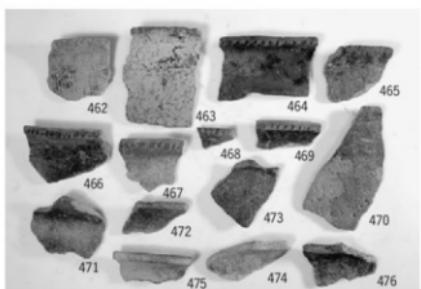
(8) 出土遺物 2



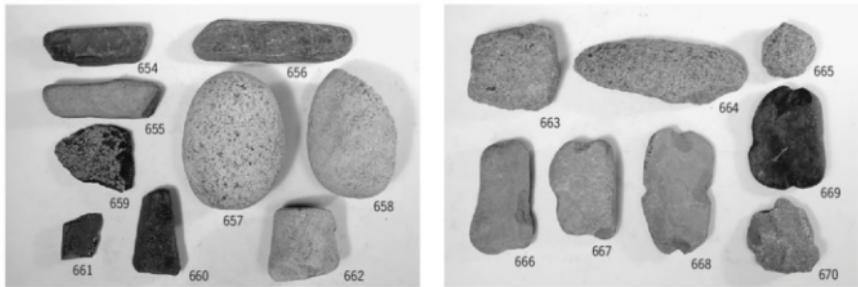
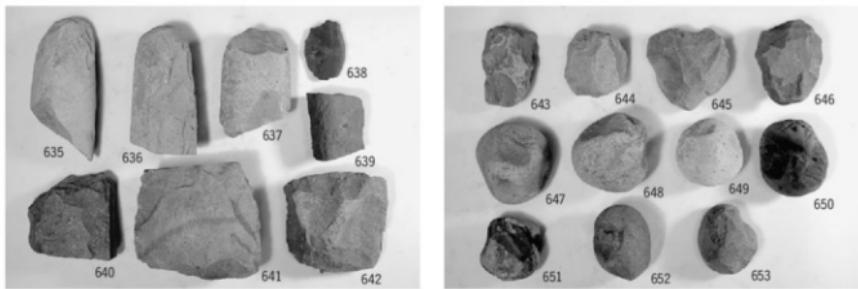
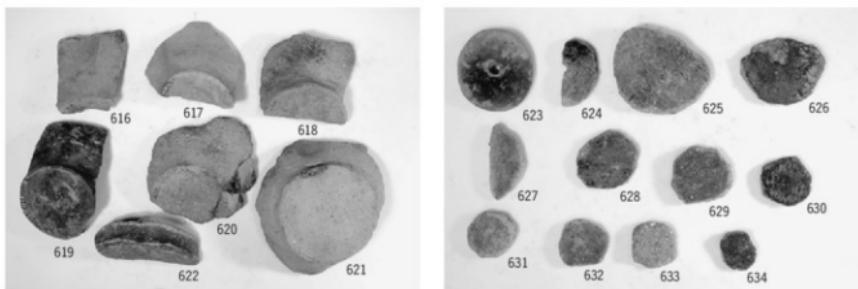
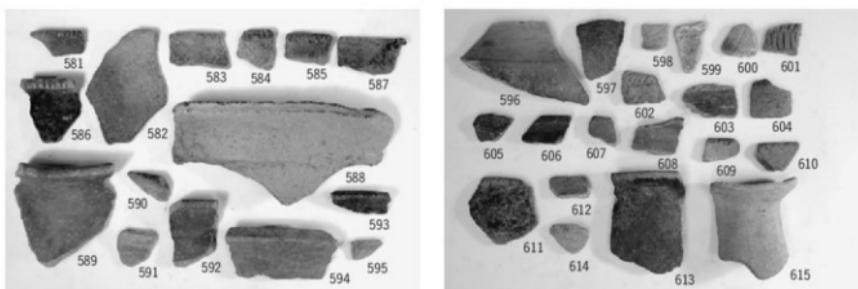
(9) 出土遺物 3



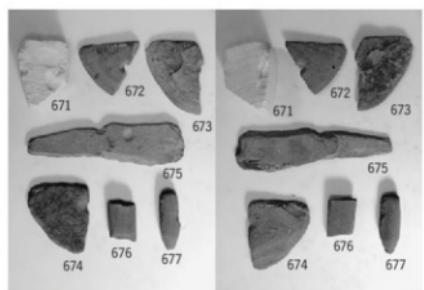
(10) 出土遺物 4



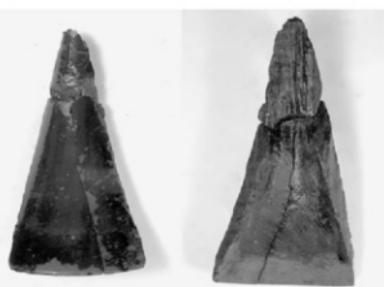
(11) 出土遺物 5



(12) 出土遺物 6

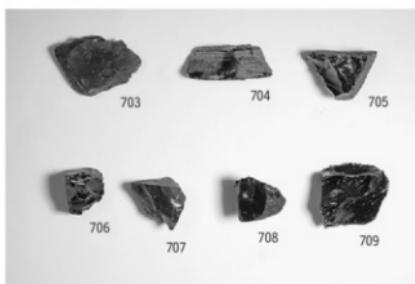
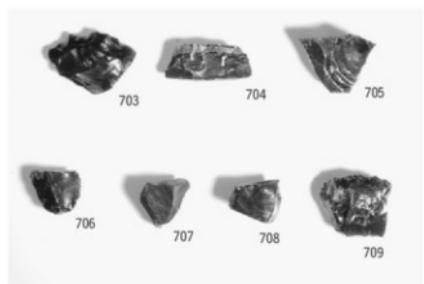
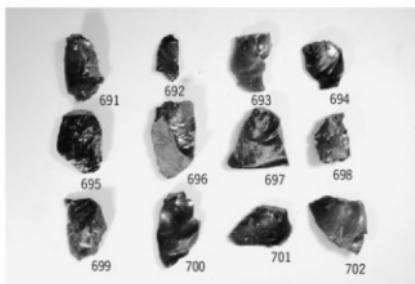
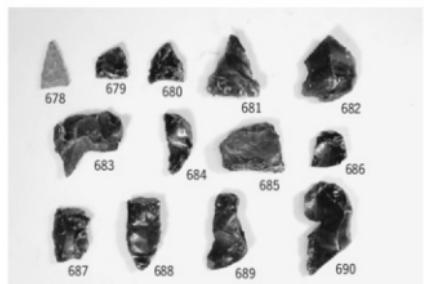


裏



711

711裏



(13) 出土遺物 7

裏

報告書抄録

ふりがな	ふくしげいなぎいせき						
書名	福重稻木遺跡						
副書名	福重稻木遺跡第3次調査報告						
卷次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	961						
編著者名	池田祐司						
編集機関	福岡市教育委員会						
発行年月日	平成19年3月30日						
作成法人ID	40137						
郵便番号	810-8621	電話番号	092-711-4667				
住所	福岡市中央区天神1-8-1						
ふりがな 遺跡名	ふりがな 遺跡所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
福重稻木遺跡	福岡市西区石丸4 丁目283-6、281-2	40137	0382	33°34'14" (世界測地系) (" ")	130°19'21"	20031015 -20031108	170m ²
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		概要	
道路建設	集落、 生産地	弥生時代前期	河川、しがらみ、 杭列	刻目突帯文土器・前 期土器・彩文壺・石 斧・石包丁・穿孔具・ 叩き石・石鍬・砾石・ 石礫・石錐・擦器・ 漆塗り高杯		弥生前期から中期の 河川の西岸にしがら みを検出し、遺物包 含層から弥生前期の 遺物が出土した。	

福重稻木遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第961集

2007年(平成19年)3月30日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

(092)711-4667

印刷魚住印刷

福岡市博多区大博町8番20号

(092)291-1946